

『朱子語類』訓門人訳注（六）

—— 卷一一八・15条～卷一一八・57条 ——

『朱子語類』訓門人研究会

本稿は、二〇〇七年秋に発足した『朱子語類』訓門人研究会の二〇一二年の成果である。本研究会は、『朱子語類』訓門人（卷一一三～卷一二二）の全訳を目指して、隔週で活動が続けている。（会の発足の経緯に関しては本誌第一六号参照。）

本稿の作成は、参加者が順番に訳注原稿を作成し、それを共同で検討した後修正を加え、さらに最終的に訳文の統一をはかるために垣内が加筆・修正をした。訳注原稿の担当者は、各箇所最後にその氏名を記した。

（垣内 景子）

今年度の研究会の参加者は以下の通りである。

宮下和大（麗澤大学モラロジ―研究所専任研究員）・阿部光麿（早稲田大学講師）・松野敏之（國士館大学専任講師）・中嶋諒（学習院大学学長付国際研究交流オフィスPD共同研究員）・小池直（早

稲田大学大学院博士後期課程）・阿部亘（早稲田大学大学院博士後期課程）・田村有見恵（早稲田大学大学院博士後期課程）・江波戸互（早稲田大学大学院博士後期課程）

凡例

※底本は、中華書局・理学叢書『朱子語類』を用いたが、標点等は適宜改めた部分もある。

※校注は以下の四本を参照し、各略称を用いた。

・『朝鮮古写 徽州本朱子語類』（中文出版社）……………楠本本

・『朝鮮整版 朱子語類』（中文出版社）……………朝鮮整版

・『朱子語類』（正中書局）……………正中書局本

・『朱子語類大全』（和刻本・中文出版社）……………和刻本

なお、次の字の異同については、一々注記しなかった。

「著」⇔「着」……………「箇」⇔「个」……………「辨」⇔「辯」……………「它」⇔「他」……………「于」⇔「於」

「邊」⇔「邊」⇔「辺」

また、以上の四本において底本とは異なる巻に収録されている場合、巻数と共にページ数を明示した。

※原文・訳文中の「」は小字注部分である。

※注で用いた略称は以下の通り。

・『語類』…『朱子語類』 なお、『語類』からの引用は、巻数と条数のみを記した（括弧内の頁数は底本

のもの。

- ・『遺書』：『河南程氏遺書』（中華書局・理學叢書『二程集』）（括弧内の頁数は上記のもの。）
- ・『門人』：『朱子門人』（陳榮捷、台灣學生書局）
- ・『資料索引』：『宋人伝記資料索引』（中華書局）
- ・『学案』：『宋元学案』（中華書局）
- ・『考文解義』：『朱子語類考文解義』（李宜哲、民族文化文庫）

卷一一八 朱子十五 訓門人六

【一一八・15】

朱子「近頃の学ぶ者たちの欠点は、すべて志が立っていないことに起因している。いままでにも千里を遠しとせずここまでやって来て共に学び、本気でこの学問に取り組むと言っていた者がいたが、後にみても、人としての成長も二、三割のところでも満足し、多少の道理が分かればそれよしとしてしまっていた。私は、学ぶ者たち自身が徹底的に取り組んで、どうしても自分では壁を打ち破れないという段階に到ったのでなければ、語ってやらなかった。そもそも人は天と地とともに並び立って「三才」の一つを担うものとい

うが、天があのように高く、地があのように厚いのに對して、自分のこの七尺の肉体がどうして天地と並び立てるのか、自分自身でよくよく考えてみなければいけない。自分のこの性が本来善であるからこそ、天と地と同じ一つのところに由來するということなのだ。それなのに、出たり入ったり、あるようなないような、といった具合に、本来固有の性を見失つてしまつていようでは、衣冠を身に着けていたとしてもそこらのものと大して變わらない。

「看今世學者病痛、皆在志不立。嘗見學者不遠千里來此講學、將謂真以此爲事。後來觀之、往往只要做二三分人、識些道理、便是（校1）。不是看他不破、不會以此語之。夫人與天地並立爲三（1）、自家當思量、天如此高、地如此厚、自家一箇七尺血氣之軀、如何會並立爲三。只爲自家此性元善、同是一處出來。一出（2）、若存（校2）若亡（3）、元來固有之性不會見得、則雖其（校3）人衣冠、其實與庶物不爭多。

（校1）和刻本は「是」を「足」に作る。

（校2）底本・楠本本・和刻本は「存」を「有」に作る。正中書局本・朝鮮整版に従い改める。

（校3）正中書局本・朝鮮整版は「其」を「具」に作る。

（1）人與天地並立爲三 『易』說卦「昔者聖人之作易也、將以順性命之理、是以立天乃道、曰陰與陽、立地之道、曰柔與剛、立人之道、曰仁與義。兼三才而兩之」。

（2）一出（一）入 『荀子』勸學篇「學也者、固學一之也。一出焉、一入焉、涂巷之人也。其善者少、不善

者多、桀紂盜跖也。全之盡之、然後學者也」。

(3) 若存若亡 『老子』四一章「上士聞道、勤而行之。中士聞道、若存若亡。下士聞道、大笑之。不笑不足以為道」。

伊川（程頤）は「学ぶ者が氣質に勝てず、習慣に流されるのは、志の問題だ」と言っている。顔淵は（孔子を評して）「之を上げば彌いよいよ高く、之を鑽きれば彌いよいよ堅く、之を瞻みるに前に在るも、忽焉として後に在り。既に吾が才を竭くす、立つ所有りて卓爾たるが如し（上げば仰ぐほどますます高く、切り込めば切り込むほどますます堅い。前に見えたかと思うと、突然後ろに現われる。……すでに私の能力を出し尽くしているのだが、まるで足場があるかのように高々とそびえ立っている）」と言っているが、顔淵は明確に見据えて成し遂げようとしたのだ。たとえば、戦陣において進軍の銅鑼が鳴り響けば、敵を殺さなければ敵に殺されるのだから、どうして前進せずにいられようか。また学ぶ者たちが科擧を受けたり仕官を求めたりする場合には、朝早くから一日中そのことばかりに専念してこそ、やっと成し遂げられるもの、そういう心持ちを学問に対して向ければ、どんなレベルにでも到達できよう。孔子は「十有五にして学に志し」てから「三十にして立つ」以下云々と言っているように、一步一步進んで行つたのだ。五峰（胡宏）は「学問は志を立てることが肝要であり、志を立てるには居敬が肝要だ」と言っているが、この言葉はたいへん良い。そもそも、陰と陽は（陰でなれば即陽、陽でなれば即陰というように）相対している。志が立ちさえすれば、陽の側

に立っているものであつて、時に志を見失つて陰の側に陥ることがあつたとしても、自覚ひとつで陽に復帰できるのだ。近頃の学ぶ者はみな、堯舜はもともと堯舜、自分は凡人、どうして堯舜になれるようか、などと言うが、こんなことを言っている者は、仏家の善財童子が「菩提心を発したからには、どんな修行を行つて仏になろうか」と言っているのにも及ばない。彼が仏になろうと励んでいるのに、我々儒者が堯舜になろうと励まないとは。」

伊川曰、學者爲氣所勝、習所奪（校1）、只可責志（1）。顏淵曰、仰之彌高、鑽之彌堅、瞻之在前、忽焉在後。既竭吾才、如有所立卓爾（2）。在顏子分明見此物、須要做得。如人在戰陣、雷鼓一鳴、不殺賊、則爲賊所殺、又安得不向前。又如學者應舉覓官、從早起來、念念在此、終被他做得（3）。但移此心向學、何所不至。孔子曰、吾十有五而志于學至三十而立（4）以上、節節推去。五峰曰、爲學在立志、立志在（校2）居敬（5）、此言甚佳。夫一陰一陽相對。志纔立、則已在陽處立。雖時失脚入陰、然一覺（校3）悟、則又在於陽。今之學者皆曰、它是堯舜、我是衆人、何以爲堯舜。爲是言者、曾不如佛家善財童子曰、我已發菩提心、行何行而作佛（6）。渠却辦作佛、自家却不辦作堯舜。」

参照。

（校1）楠本本・正中書局本・朝鮮整版・和刻本は「氣所勝、習所奪」を「氣所奪、習所勝」に作る。注（1）（校2）正中書局本は「立志在」を「立志」に作る。

(校3) 楠本本は「覺」を「學」に作る。

(1) 伊川曰く只可責志 『遺書』卷十五・96条(二五五頁)「學者爲氣所勝、習所奪、只可責志」。

(2) 顏淵曰く如有所立卓爾 『論語』子罕。

(3) 被他做得 この「被」字の意味未詳。同様の用例を挙げる。卷一一五・41条(二七八二頁)「尹和靖在程門直是十分鈍底、被他只就一箇敬字上做工夫、終被他做得成」、卷二九・55条(七四一頁)「釋老雖非聖人之道、却被他做得成一家」。

(4) 孔子曰く三十而立 『論語』為政。

(5) 五峰曰く立志在居敬 胡宏「復齋記」(『胡宏集』一五二頁)「儒者之道、率性保命、與天同功、是以節事取物、不厭不棄、必身親格之、以致其知焉。夫事變萬端、而物之感人無窮。格之之道、必立志以定其本、而居敬以持其志。志立于事物之表、敬行乎事物之内、而知乃可精」。胡宏のこの言葉については、卷十八・113〜115条(四一九〜四二〇頁)、及び『大学或問』伝五章参照。

(6) 善財童子曰く行何行而作佛 善財童子は、『華嚴經』入法界品に見える求道の菩薩。発心して求道の旅に赴く。善財童子の旅は、仏道修行の段階を示すものとされる。卷十一・83条(二八七頁)「善財五十三處見善知識。問皆如一、云我已發三藐三菩提心、而未知如何行菩薩行、成菩薩道」、卷一二六・60条(三〇二三頁)「他說治生產業、皆與實相不相違背云云、如善財童子五十三參、以至神鬼神仙士農工商技藝、都在他性中」。

鄭可学「志を立てることはもちろんその通りですが、では、志は何でもって立てればよいのでしょうか。」
朱子「本を正すことから立ててゆくのだ。そうすればゆくゆくは、人がちつぽけな身でありながら天地と並び立ち、匹夫の身でありながら天下を安んずることも、道理としてあり得るのだ。」

方伯謨（土繇）「斉の宣王が孟子を用いていたら、天下を安んずることができたのでしょうか。」

朱子「孟子は実際に斉王に会いに行つて、斉王が王道を行ひ得る資質をもっていることを見抜いていた。ただ斉王はつまらぬ利害を計算したり、わずかな欲得を捨てられなかったために、すっかり昏まされてしまつたのだ。大きく大切なものがしつかり立ちさえすれば、その他の物欲などは一斉に退いていくものだ。」

また『中庸』の一節を取り上げ、

朱子「『徳性』『高明』『広大』というのは、みな本来のものだ。『問学』『中庸』『精微』というのは、その本来のものを間斷させないための方法だ。」

某因問「立志固是、然志何以立。」曰「自端本（1）立。以身而參天地、以匹夫而安天下、實有此理。」
方伯謨問「使齊王用孟子、還可以安天下否。」曰「孟子分明往見齊王以道可行（2）。只是他計些小利害、愛些小便宜（3）、一齊昏了。自家只立得大者定、其他物欲一齊走退。」又（校1）舉中庸一段（4）、曰徳性、曰高明、曰廣大、皆是元來底。問學中庸精微、所以接續此也。」

(校1) 正中書局本・朝鮮整版・和刻本・楠本本は「又」を「有」に作る。

(1) 端本 本を正す。卷二〇・79条(四六二頁)「問、孝弟仁之本。今人亦有孝弟底而不盡仁、何故。

莫是志不立。曰、亦其端本不究、所謂由之而不知、習矣而不察」、卷七九・88条(二〇四四頁)「五皇極、只是説人君之身、端本示儀於上、使天下之人則而効之。……人君端本、豈有他哉、修於己而已」。

(2) 孟子分明往見齊王以道可行 『孟子』梁惠王上。孟子が斉の宣王に対して「王之不王、不爲也。非不能也」と述べていること等を参照。

(3) 計些小利害、愛些小便宜 卷四二・92条(一〇九三頁)「今人做事、未論此事當做不當做、且先計較此事有甚功效。既有計較之心、便是專爲利而做、不復知事之當爲矣。……凡人若能知所當爲、而無爲利之心、這意思便自高遠。才爲些小利害、計些小便宜、這意思便卑下了」。

(4) 中庸一段 『中庸』(章句二七章)「故君子尊德性而道問學、致廣大而盡精微、極高明而道中庸」。

鄭可学 「孔門の弟子たちが仁や智を問うた箇所では、孔子はすべて具体的な事柄から実践してゆくよう答えています。」

朱子 「彼らは志がすでに立っているから、進むべき方途を求めたのだ。ただ孔門の弟子にも志が立っていない者もいる。宰予や冉求がそうだ。顔子はもとより言うに及ばず、子路が「聞くこと有りて、未だ之を行はざれば、惟だ聞くこと有るを恐る(教えを聞いてそれを実践できていないうちは、更に聞くことを恐れた)」

というのも志に他なるまい。漆雕開や曾点にも志がある。孔子は陳に在って魯の「狂簡（志が大きく、物事にとらわれない）」の士を思ったという。なぜ狂簡の士が思うに足るのか。やはりその志あることを評価したのだ。聖人を師として学びさえすれば、彼らは君子となり得るのだ。」

「以下、鄭可学への訓誡。」〔滕璘の記録は同一場面の別記録。後の滕璘への訓誡に採録。〕

某問「孔門弟子問仁問智（1）、皆従一事上做去。」曰「只爲他志已立、故求所以趨向之路。然孔門學者亦有志不立底、如宰予冉求（2）是也。顔子固不待説、如子路有聞、未之能行、惟恐有聞（3）、豈不是有志。至如漆雕開曾點（4）皆有志。孔子在陳、思魯之狂士（5）。狂士何足思。蓋取其有志。得聖人而師之、皆足爲君子。」

〔以下訓可學。璘録聞同（校1）録異。見後訓璘（6）。〕

（校1）底本は「聞同」を「云□」に作り、楠本本は「云同」に作る。正中書局本・朝鮮整版・和刻本に従い改める。

（1）孔門弟子問仁問智　たとえば『論語』顔淵「顔淵問仁。子曰、克己復禮爲仁。一日克己復禮、天下歸仁焉。爲仁由己、而由人乎哉。顔淵曰、請問其目。子曰、非禮勿視、非禮勿聽、非禮勿言、非禮勿動、仲弓問仁。子曰、出門如見大賓、使民如承大祭。己所不欲、勿施於人。在邦無怨、在家無怨」、「司馬牛問仁。樊遲問仁。子曰、愛人。問知。子曰、知人」、「論語」雍也「樊遲問知。子曰、務民之義、敬鬼神而遠之、可謂知矣。問仁。曰、仁者先難而後獲、可謂仁矣」。

(2) 孔門學者亦有志不立底、如宰予冉求 宰予については『論語』公冶長「宰予晝寢。子曰、朽木不可雕也、糞土之牆不可朽也、於予與何誅」、陽貨「宰我問、三年之喪、期已久矣……」等を参照。冉求については雍也「冉求曰、非不說子之道、力不足也。子曰、力不足者、中道而廢。今女畫」、先進「季氏富於周公、而求也爲之聚斂而附益之……」等を参照。

(3) 子路有聞、未之能行、惟恐有聞 『論語』公冶長。

(4) 漆雕開曾點 漆雕開については『論語』公冶長「子使漆雕開仕。對曰、吾斯之未能信。子說。」を参照。曾点については『論語』先進で孔子に「吾與點也」と称されていることを参照。

(5) 孔子在陳、思魯之狂士 『論語』公冶長「子在陳曰、歸與、歸與。吾黨之小子狂簡、斐然成章、不知所以裁之」。

(6) 見後訓璣 卷一一八・33条、34条(二八四五頁)を指す。

(15条担当 小池直)

【一一八・16】

朱子「昨日君たちに話した志を立てるということについて、退出後どのように考えたかね。」

鄭可学「先生のお言葉をもとに子細に考えてみましたが、すべて現実的で確かな道理と存じます。ふだんから人を害することはしないこと、道義に反する財貨を得ようとしなないことなど、(志が立っていれば)自

ずとそうなるものです。」

朱子「自ずとそうなるのであれば、なぜ堯舜になれずにいるのだね。」

鄭可学「(孟子のいうように)「其の心を尽くせ」ば、「其の性を知る」ということでしょうか。」

朱子「試験問題の解答ではないのだから、もつと自分のこととして実感を持って考えなさい。(孟子は)「徐行して長に後るるは、之を弟と謂ふ(ゆつくりと年長者の後ろを歩くことを悌という)」というが、どうして「悌」であるかが分かれば、堯舜となれるのだ。」

朱子「(孔子は)「徳を執ること弘からず、道を信ずること篤からざれば、焉んぞ能く有りと為さん、焉んぞ能く亡しと為さん(徳を守ることが広くなく、道を信じることが篤くないようでは、生きていようが死んでいようが同じである)」というが、これがいわゆる天理と人欲の分かれ目だ。さらに孟子が滕文公に答えた章、曹交が孟子に問うた章を熟読しなさい。こういったところが分かれば、大いに効率よく学べるだろう。」

先生問「昨日與吾友説立志一段(1)、退後思得如何。」某曰「因先生之言、子細思之、皆是實理。如平日見害人之事不爲、見非義之財不取、皆是自然如此。」曰「既自然如此、因何做堯舜不得。」某謂「盡其心、則知其性(2)。」曰「此不是答策題、須是實見得。徐行後長者謂之弟(3)、須見得如何弟、是作得堯舜。」因語「執徳不弘、信道不篤、焉能爲有、焉能爲亡(4)、所謂天理人欲也。更將孟子答滕文公(5)、曹交問孟子(6)章熟讀。纔見得此、甚省力。」

※卷一一八・37条に滕璘に対する訓戒として、本条と部分的に類似した話題が見える。

(1) 昨日與吾友說立志一段 前条(卷一一八・15条)を指す。

(2) 盡其心、則知其性 『孟子』尽心上「孟子曰、盡其心者、知其性也。知其性、則知天矣。存其心、養其性、所以事天也。殀壽不貳、修身以俟之、所以立命也」。

(3) 徐行後長者謂之弟 『孟子』告子下「曹交問曰、人皆可以爲堯舜、有諸。孟子曰、然。……徐行後長者、謂之弟。疾行先長者、謂之不弟。夫徐行者、豈人所不能哉。所不爲也。堯舜之道、孝弟而已矣。子服堯之服、誦堯之言、行堯之行、是堯而已矣」。

(4) 執德不弘、信道不篤、焉能爲有、焉能爲亡 『論語』子張。

(5) 孟子答滕文公 『孟子』滕文公上の一連の記事を指す。その冒頭に「滕文公爲世子、將之楚、過宋而見孟子。孟子道性善、言必稱堯舜」とある。

(6) 曹交問孟子 (3) 参照。

【一一八・17】

鄭可学「何かをするときに、往々にしてはじめは張り切っていても、最後は続かなくなってしまう。血気(肉体的な制約)のなせるわざなのでしょうか。」

朱子「義理の氣（正しい道理に基づく行動）が必要であるとはいえ、血氣もまたないというわけにはいかない。孟子は「氣は、体の充なり（氣は体じゅうに充ち満ちている）」というが、それらの氣も義理（正しい道理）によって主導されなければならないのだ。」

問「作事多始銳（1）而終輟、莫是只爲血氣使。」曰、「雖說要義理之氣（2）、然血氣（2）亦不可無。孟子、氣、體之充（3）、但要義理爲主耳。」

（1）銳 やる氣に満ちている、張り切っている。卷十・93条（一七四頁）「讀書不可不先立程限。……爲學亦然。今之始學者不知此理、初時甚銳、漸漸懶去、終至都不理會了。此只是當初不立程限之故」、卷一一一・27条（二九二六頁）。

（2）義理之氣／血氣 卷十三・108条（二三九頁）「血氣之怒不可有、義理之怒不可無」、卷六二・40条（一四八七頁）「人自有人心道心、一箇生於血氣、一箇生於義理。饑寒痛癢、此人心也。惻隱羞惡是非辭遜、此道心也」。

（3）孟子、氣、體之充 『孟子』公孫丑上「夫志、氣之帥也。氣、體之充也。夫志至焉、氣次焉。故曰、持其志、無暴其氣」。

鄭可学「学問は、遠大なところを志さねばならないと存じます。」

朱子「もちろんそうだが、微細なところもまた研鑽しなければならぬ。もしも微細なところを研鑽しなければ、いわゆる遠大なところというの、当てずっぽうでひとしきり怪しげなことを語るに過ぎず、結局何の益もない。ことの大小を知り、深淺を測り、さらに輕重を区別しなければいけないのだ。」

鄭可学「ふだん読書をするときには、先生の御説を参照して、それでようやく全体の雰囲氣を知るのがやっとです。」

朱子「雰囲氣というのも、分かりやすいものではない。おそらく文字面を理解しているだけなのだろう。」

問「講學須當志其遠者大者。」曰「固是。然細微處亦須研窮。若細微處不研窮、所謂遠者大者、只是揣（1）作一頭詭怪之語、果何益。須是知其大小、測其淺深、又別其輕重。」因問「平時讀書、因見先生說、乃知只得一模樣耳。」曰「模樣亦未易得、恐只是識文句。」

（1）揣 おしはかる。卷九・76条（一五八頁）「今之學者不曾親切見得、而憶度揣摩爲說、皆助長之病也」。

鄭可学「性に反るといふのは、どういふことでしようか。」

朱子「君が「反る」と言えるといふことは、それがとりもなおさず天性（もともと持っていた性）だといふことだ。後はひたすらそれを發揮させていくだけのこと、それ以外に何の道理もない。滕文公が孟子に質問するや、孟子はすぐさま「性善」をいったが、これは今から考えると、なんと一足飛びなことか。とはいへ、性はもともと自分の家にあるようなものだから、何の言い過ぎといふことがあろうか。性を立てたからには、ことあるごとに点検し、物事がやつて来れば、正しければそれに従い、間違つていればそれを受け入れないようにするだけのことだ。（孟子のこの一節の）下文は長々と続いているが、先ずは根本のところで努力するようにしなさい。まだここに留まるのであれば、自分の見解をよくよく見つめ直してみなさい。」

問「反其性如何。」曰「只吾友會道箇反時、此便是天性。只就此充之、別無道理。滕文公纔問孟子、孟子便道性善（１）。自今觀這、豈不躡等（２）。不知此乃是自屋裏物、有甚過當。既立得性了、則每事點檢、視事之來、是者從之、非者違之。此下文甚長、且於根本上用工夫。既尚留此、便（校１）宜審觀自見。」

（校１）正中書局本・朝鮮整版は「便」を「更」に作る。

（１）滕文公纔問孟子、孟子便道性善 『孟子』滕文公上「滕文公爲世子、將之楚、過宋而見孟子。孟子道性善、言必稱堯舜」。

(2) 躡等 順序を無視して、一足飛びに進もうとすること。『礼記』学記「幼者聽而弗問、學不躡等也」。孟子が性善を述べることを「躡等」と見なすことについては以下を参照。卷五五・3条（一三〇六頁）「孔子罕言性。孟子見滕文公便道性善、必稱堯舜、恰似孟子告人躡等相似。然他亦欲人先知得一箇本源、則爲善必力、去惡必勇。今於義理須是見得了、自然循理、有不得不然」。

（16）19条担当 中嶋 諒

【一一八・20】

再び面会して教えを請うた。

鄭可学「日ごろ読書をしている時にはそれなりに悟るところがあつたつもりでいても、書物から離れると別のものになってしまいます。また、いつも思慮が紛擾し、敬を保とうとしてもどうしても気持ちがつるんでしまいます。この病根はどこにあるのでしょうか。」

朱子「それは自分自身に求めずに書物の中に求めてばかりいるから、自然とそうなってしまうのだ。古人は「仁を為すは己に由る、人に由らんや（仁を実践するのは自分しだいだ、どうして人だのみにできようか）」と言っている。日常の中で自分自身がかかわることはすべて道でないものはない。書物はこの心を繋ぎとめるためのものにすぎない。だから、必ず先ず自分自身に求めて、その後で書物に求めるようにすれば、書物を読んでも味わいが得られるようになる。」

朱子「敬を保とうとしても気持ちがつるんでしまうのは、まだ敬ができていないことだ。途切れることがなくなつてこそよいのだ。思慮が雑多で混乱すると言うようなことは、思慮すべきものは思慮し、思慮すべきでないものは思慮しないようにすれば、必ずや混乱することはないはずだ。」

鄭可学「自分の心で理解しようとするとき、何か一つの事に集中すべきですか。それとも一つ一つの事について考えるべきですか。」

朱子「どのような事でもすべて自分の心で考え対処すべきものだ。たとえば孝についてはどのようなものが弟であるかを求めるだけだ。要は『易』にいう「善を見れば則ち遷り、過ち有れば則ち改む」ということに尽きる。聖人の千言万語はすべてこの趣旨からはずれることはない。久しく学習を積み重ねてじつくりと浸透させれば、まるで芳醇な酒を飲むように、その味わいはますます深まり、ようやく真の是非がわかつてくる。是のようで非であったり、有るようで実は無かったりというようでは、結局はぼんやりとしてしまう。これこそ学ぶ者の大きな病なのだ。」

鄭可学「読書はどのようにすればよいでしょうか。」

朱子「少しずつ読みなさい。およそ書物を読むときは、細かく徹底的に研究すべきで、いい加減に読み過ぎしてはいけません。たとえば五項目の議論があれば、書物を開いた時には一つずつ弁別して明らかにし、一定の見解を求めなければならぬ。後日再び読むときに、また冒頭から点検しなおしてみると、前回の読書がはなはだ草卒であつたとわかる。最近の学ぶ者の読書は、みな六経には通じていると言うものの、いざ質問してみると往々にして不正確だ。最初に読んだときにざっと読み飛ばしたに過ぎないのだろう。孟子も「仁

も熟すに在り（五穀も熟すればうまみを増すように、仁も熟することが肝要だ）」といっている。君たちももつとよく考えてみることだ。だいたい古人の読書は今の人の読書とは異なっている。孔子門下の学ぶ者たちは、聖人（孔子）に仁を質問したり、知を質問しただけで、その中にすでに一生涯取り組むべきことがあった。今の人の読書は、仁義礼智などすべてを理解しているが、それらを落着かせるところがない。これは熟していないためだ。昔、五峰（胡宏）は都で龜山（楊時）に読書法をたずねたが、龜山はまず『論語』を読めと答えた。五峰が『論語』二十篇のうちでどれが重要かを質問すると、龜山はどれも重要だと答えたという。このことからよくわかるだろう。」

再見、請教。因問「平日讀書時似亦有所見、既釋書（1）則別是一般（2）。又、每苦（校1）思慮紛擾、雖持敬亦未免弛慢、不知病根安在。」曰「此乃不求之於身、而專求之於書、固應如此。古人曰爲仁由己、而由人乎哉（3）。凡吾身日用之間、無非道、書則所以接湊此心耳。故必先求之於身、而後求之於書、則讀書方有味。」又曰「持敬而未免弛慢、是未嘗敬也、須是無間斷乃可。至如言思慮多、須是合思即思、不合思者不必思、則必不擾亂。」又問「凡求之於心、須是主一。爲或於事求之。」曰「凡事無非用心處、只如於孝則求其如何是孝、於弟則求其如何是弟。大抵見善則遷、有過則改（4）。聖人千言萬語、不出此一轍。須積習時（校2）久、游泳浸漬（校3）、如飲醇酒、其味愈長、始見其真是真非。若似是而非、似有而（校4）實未嘗有、終自（校5）恍惚然、此最學者之大病。」又問「讀書宜以何爲法。」曰「須少看。凡讀書須子細研窮講究、不可放過。假如有五項議論、開策時須逐一爲別白（5）、求一定說。若他日再看、又須從頭檢閱、

而後知前日之讀書草略甚矣。近日學者讀書、六經皆云通。及問之、則往往失對、只是當初讀時綽過了。孟子曰、仁在乎熟(6)、吾友更詳思之。大抵(校6)古人讀書、與今人異。如孔門學者於聖人、纔問仁、問知、終身事業已在此。今人讀書、仁義禮智總識、而却無落泊處、此不熟之故也。昔五峰於京師問龜山讀書法(7)、龜山云、先讀論語。五峰問、論語二十篇、以何爲緊要。龜山曰、事事緊要。看此可見。」

(校1) 正中書局本・和刻本・楠本本は「苦」を「若」に作る。

(校2) 正中書局本は「時」を「持」に作る。

(校3) 楠本本は「漬」を「清」に作る。

(校4) 楠本本は「而」を「無」に作る。

(校5) 正中書局本・朝鮮整版・和刻本は「自」を「日」に作る。

(校6) 楠本本・和刻本は「抵」を「底」に作る。

(1) 釋書 書物を手から離す、書物を離れる。卷八・148条(二四六頁)「又有讀書見義理、釋書、義理不見、亦可慮」。

(2) 別是一般 別のこと、別のはなし、別の種類。「一般」は「二種」の意味。卷一〇〇・6条(二五四二頁)「問、康節學到不惑處否。曰、康節又別是一般」、卷一〇一・6条(二五五六頁)「上蔡多說過。了。龜山巧、又別是一般、巧得又不好」。

(3) 爲仁由己、而由人乎哉 『論語』顏淵。

(4) 見善則遷、有過則改 『周易』 益卦・象伝 「君子以見善則遷、有過則改」。

(5) 別白 弁別する、区別する。卷四一・21条(一〇四七頁) 「靜時要體認得親切、動時要別白得分明」、

卷十・81条(一二二頁) 「觀書初得味、即坐在此處、不復精研、故看義理、則汗漫而不別白」。

(6) 孟子曰、仁在乎熟 『孟子』 告子上 「五穀者、種之美者也。苟爲不熟、不如萁稗。夫仁亦在乎熟之而已矣。」

(7) 昔五峰於京師問龜山讀書法 卷十九・74条(四三九頁) 「因舉五峰舊見龜山、問爲學之方。龜山曰且看論語。五峰問論語中何者爲要。龜山不對。久之曰熟讀」、卷一〇一・115条(二五八二頁) 「仁仲見龜山求教、龜山云且讀論語。問以何爲要。云熟讀」、『文集』 続集卷六 「答江隱君」 第四書 「昔有人見龜山先生請教。先生令讀論語。其人復問、論語中要切是何語。先生云皆要切、且熟讀可也」。

【一一八・21】

鄭可学 「私は生まれつき非常に気が短いので、数年来怒りを抑えることに力を入れて修養し、幾分かはましになったように感じておりました。しかし、何らかの出来事に遭遇して無意識のうちに怒ってしまうことがあります。どうやってこの欠点を取り除けばよいのでしょうか。」

朱子 「それもまた熟するしかない。子供は何べんも読むと自然に記憶してしまうが、これが熟したという証しだ。だいたい生まれついた性質というものは長い年月を通じて深くなってしまうから、どうやっ

て短期間でことごとく片付けてしまえよう。日夜抑制し警戒して熟するようにすれば、そのうち自ずと取り除かれるだろう。」

問「可學稟性太急、數年來力於懲忿（1）上做工夫、似減得分數。然遇事不知不覺忿暴、何從而去此病。」
曰「亦在乎熟耳。如小兒讀書編（校1）數多、自記得（2）、此熟之驗也。大抵稟賦得深多少年月、一旦如何便盡打疊得。須是日夜懲戒之以至於熟、久當自去。」

（校1）楠本本・正中書局本・朝鮮整版・和刻本は「徧」を「遍」に作る。

（1）懲忿 『易』損・象伝「君子以懲忿窒欲」。

（2）小兒讀書編數多、自記得 卷十・37条（二六五頁）「小兒讀書記得、大人多記不得者、只爲小兒心專。一日授一百字、則只是一百字、二百字、則只是二百字。大人一日或看百板、不恁精專。人多看十分之十、今宜看十分之一」、同・38条「小兒讀書所以記得、是渠不識後面字、只專讀一進耳」。

【一一八・22】

ある晩、王春「先生の親戚」と魏才仲（丙）と共に先生にお会いした。

朱子「君は何歳かね。」

鄭可学「三十七歳です。」

朱子「もう時期を逸している。ここでぐずぐずしていると、ぐずぐずしたまま終わってしまうぞ。昔の人は読書をして、二十四、五歳には読み方を確立していた。」

鄭可学「日ごろ学問に志してはいるものの、貧乏のために駆けずり回っていて、読書に励んではいるのですが、方向が定まりません。」

朱子「読書は、道理を徹底して追究しなければならない。君は日ごろ『論語』と『孟子』は読んでいるのかね。」

常に読んでおりますとお答えすると、

朱子「どんなふうに読んでいるのかね。」

鄭可学「日中は『論孟精義』を読んでいます。」

朱子「『論孟精義』を読むことには一長一短がある。諸家の説によつて聖人の意を考えて自分の心に了解するならば『論孟精義』は役に立つ。もし漫然と読み流すだけならば、風が右から左に抜けるようなもので、百遍読んでも何の足しにもならない。『論語』『孟子』をちゃんと読める者ならば、『論語』『孟子』だけがあればよいのであって、『論孟精義』を必要とするまでもない。」

先生はそこで（『論語』の）「学而時習之（学びて時にこれを習ふ）」を挙げて質問された。

朱子「君はこれをどう解釈する。」

私は一般的な解釈を申しあげた。

朱子「聖人がこの五字を用いているのだから、一字として無意味な文字はない。学んでその後折りこまれて学んだことを習うのだから、学ばなければ何を習うというのか。ここという「学」とは、必ずしも古人の言行を学ぶことだけではない。すべての事において学ぶのだ。この人がすばらしいならば、その人を学ぶのであり、この事がすばらしいならば、その事を学ぶのだ。「これを習ふ」とは既に学んだものを習うのだ。習って熟せば、喜ばしくないことがあるうか。最近の学ぶ者の多くは、学びて習わずといった具合だ。」

鄭可学「『論語』の「学びて思はざれば則ち罔^{くら}し」もその意味ですか。」

朱子「まずは本文に沿って理解しなさい。他から引つ張り集めて理解するのは、学ぶ者の最も大きな弊害だ。」

朱子「『朋有り、遠方より来た』れば、なぜ「楽」しいのかね。」

朋友を得て共に議論ができるから楽しいのでは、と私が答えた。

朱子「もしすでに自分に得るところがあつたならば、どうして更に朋友を必要とするのだね。」

再三教えを請うたが、先生はこう言われた。

朱子「まずは自分で考えてみなさい。」

一日晩、同王春「先生親戚。」魏才仲請見。問「吾友年幾何。」對云「三十七。」曰「已自過時。若於此因循（1）、便因循了。昔人讀書、二十四五時須已立得一門庭（2）。」某因說「平日亦有志於學。只是爲貧奔走、雖勤讀書、全無趨向。」曰「讀書須窮研道理。吾友日看論孟否。」對以常看。曰「如何看。」曰「日間只

是看精義。」曰「看精義、有利有害（3）。若能因諸家之說以考聖人之意而得於吾心、則精義有益。若只鶻突綽過、如風過耳、雖百看何補。善看論孟者、只一部論孟自亦可、何必精義。」因舉學而時習之（4）問曰「吾友何說。」某依常解云云。先生曰「聖人下五箇字、無一字虛。學然後時習之、不學則何習之有。所謂學者、不必前言往行、凡事上皆是學、如箇人好、學其爲人、箇事好、學其爲事（校1）。習之者、習其所學也。習之而熟、能無悅乎。近日學者多學而不習（校2）。」某又問「學而不思則罔（5）、亦是此意。」曰「且就本文理會。牽傍會合（校3）、最學者之病。」又問「有朋自遠方來（6）、何故樂。」對以得朋友而講習、故樂。曰「若是已得於己、何更待朋友。」再三請益。曰「且自思之。」

（校1）楠本本は「如箇人好、學其爲人、箇事好、學其爲事」を「如箇人好、學其爲人、箇事好、學其爲人、箇事好、學其爲事」に作る。

（校2）楠本本は「多學而不習」を「多習而不學」に作る。

（校3）楠本本は「牽傍會合」を「牽會合」に作る。

（1）因循　ぐずぐずする、横着をする。卷一一三・28条（二七四七頁）「學者最怕因循、莫說道一下便要做成」、卷二一八・33条（二八四四頁）「若無求復其初之志、無必爲聖賢之心、只見因循荒廢了」。

（2）立得一門庭　進め方や方法を確立すること、見解を打ち立てること。『遺書』卷二二上・96条（二九六頁）に「學者要自得。六經浩渺乍來難盡曉。且見得路逕後、各自立得一箇門庭、歸而求之可矣」とあり、卷九六・3条（二四六〇頁）にこの言葉についての問答がある。「六經浩渺、乍難盡曉。且見得

路逕後、各自立得一箇門庭。問、如何是門庭。曰、是讀書之法、如讀此一書、須知此書當如何讀。伊川教人看易、以王輔嗣胡翼之王介甫三人易解看、此便是讀書之門庭。緣當時諸經都未有成說、學者乍難捉摸、故教人如此」。

- (3) 看精義、有利有害 『論孟精義』は朱熹が道学諸子の説を集めたもの。その読み方について卷十九「論孟綱領」で取り上げている。卷十九・74条(四三九頁)「精義太詳、説得沒緊要處、多似空費工夫」、同82条(四四一頁)「心粗性急、終不濟事。如看論語精義、且只將諸説相比並看、自然比得正道理出來」、同83条(四四一頁)「看精義、須寬著心、不可看殺了」、同85条(四四二頁)「且如精義中、惟程先生説得確當。至其門人、非惟不盡得夫子之意、雖程子之意、亦多失之。今讀語孟、不可便道精義都不是、都廢了」。

- (4) 學而時習之 『論語』学而「子曰、學而時習之、不亦説乎。有朋自遠方來、不亦樂乎。人不知而不慍、不亦君子乎」。

- (5) 學而不思則罔 『論語』為政「子曰、學而不思則罔、思而不學則」。

- (6) 有朋自遠方來 本条注(4) 参照。

鄭可学「私は平素より読書のみちすじが分からず、徒に労力を費やしてまいりました。幸いにも先生の御教示を得て、やつと向かうべき方向を知りました。これからは日夜努力して、教えを無駄にしないようにしてゆきます。」

朱子「君がそう言うのなら、人の手本とならねばならぬ。第一には、いい加減にやり過ぎようなことはないこと。一つの章の意味を研究して理解できてから、次の章を読むようにしなさい。最近の学ぶ者の多くはいい加減に読み飛ばしてしまうので、ついには袋小路に陥ってしまい、すべて台無しにしてしまう。だいたい読書が雑だと、心も雑になるものだ。読書が細やかだと、心も細やかになる。研究が未熟のうちは、ちよつと意味が分かつて、是とするも良し、非とするも良しと考えてしまう。所謂「これを毫釐に差^{ちが}へば、繆^{あやま}つに千里を以てす（ほんの小さな間違いが重大な誤りにつながる）」ということを理解しなければいけない。」

語次、因道「某平日讀書（校1）不識塗徑、枉費心力。適得先生開諭、方知趨向。自此期早夜孜孜、無負教誨。」曰「吾友既如此說、須與人作樣子。第一、下工夫莫草略。研究一章義理已得、方別看一章。近日學者多緣草略過了、故下梢頭價無去處、一齊棄了。大凡看書粗、則心粗。看書細、則心細。若研窮不熟、得些義理、以爲是亦得、以爲非亦得。須是見得差之毫釐、繆以千里（1）方可。」

（校1）底本は「書」を「箇」に作る。正中書局本・朝鮮整版・和刻本に従いに改めた。

(1) 差之毫釐、繆以千里 『文集』卷十一(壬午応詔封事)「易所謂差之毫釐、繆以千里」、同卷十二(己酉擬上封事)「易曰、正其本萬事理、差之毫釐、繆以千里」、同卷二四(与陳侍郎書)「傳曰、差之毫釐、繆以千里」とあるように、朱熹はこの語を『易』からの引用とするが、『易』の現行テキストにこの語は無い。『史記』太史公自序「易曰失之豪釐、差以千里」、『漢書』東方朔伝「易曰、正其本萬事理、失之毫釐、差以千里」、劉向『說苑』卷三・建本「易曰、建其本而萬物理、失之毫釐、差以千里」是故君子貴建本而重立始」、賈誼『新書』胎教「易曰、正其本而萬物理、失之毫釐、差以千里、故君子慎始」など、古くより『易』からの引用とされてきた語である。『易緯通卦驗』卷上「正其本而萬物理、失之毫釐、差以千里」に基づくとする程迥の考証がある(『周易章句外編』)。

(20) 23条担当 宮下 和大

【一一八・24】

鄭可学「昨日、先生がお訊ねになったことにつきまして、退出後(『孟子』滕文公篇の数章を熟読しました。たとえば昨日話題になった「四端」ですが、これこそ真の心、性善にほかなりません。いま天理と人欲の区別を明らかにし、人欲を除去できたならば、天理は自ずと明らかになりましょう。自分自身のことですから、どうしても前に向かって進まないでおられまじょうか。」

朱子「その通りだ。しかし、まだ人欲を云々するには及ばない。人欲はやはり除き難いものだ。まずは自

ら道理を体認しなさい。どうすれば人の性は善であり、堯舜は誰でもなれるものかということをしつかりと見極められるのか、どのようなものが仁であり、義であるのか。こうしたことに見解がもてたならば、立ち止まろうとしても自ずと立ち止まることはできず、学問は前に向かって進み続けるだろう。孟子は「求むれば則ち之を得、舍つれば則ち之を失ふ」と言ったが、今の学ぶ者は求めても得ていることに気づかず、捨てても失ったことに気づかない。ただのんびりと日々を無為に過ごし、今日は明日を待ち、明日はさらにあさつてを待つといった有り様だ。」

話し終わらぬうちに、伯謨（方士繇）がやって来た。

朱子「先ほどから聞いていると、子上（鄭可学）はあれこれ話し、徳粹（滕璘）は黙っているが、どちらも努力が足りない。謝上蔡（良佐）は明道（程顥）の前で史書を挙げて文章を作ったところ、明道に「賢く記憶力もよいが、玩物喪志（外的なことに夢中になり、本来の志を忘れてしまっている）だ」と言われ、冷や汗をかいたという。この時の上蔡のようにはっと感じ入ってこそよいのだ。いま、ただ相変わらずのことをそんなふうにやり過ぎしていて、どうしてはっとして発憤することができようか。いてもたってもいられないようであればならないのだ。（孟子の）所謂「一朝も居ること能はず（一日とて維持できない）」だ。」

問「昨日先生所問、退而以滕文公數章熟讀。只如昨日所說四端（1）、此便是真心、便是性善。今只是於天理人欲上判了、去得人欲、天理自明。自家裏事、豈有不向前。」先生曰「然。未要論到人欲、人欲亦難去。只且自體認這簡理、如何的見（2）是性善、堯舜是可爲（3）。如何是仁、如何是義。若於此有見、要

已自己不得。孟子曰、求則得（校1）之、舍則失之（4）。今學者求不見得、舍不見失（校2）、只是悠悠、今日待明日、明日又待後日。」語未畢、伯謨至。先生云「適來所言、子上却有許多說話、德粹無說、然皆是不勉力作工夫。謝上蔡於明道前舉史書成文、明道曰、賢却會記得、可謂玩物喪志。上蔡發汗（5）。須是如此感動、方可。今只且於舊事如此過、豈是感發。須是不安、方是、所謂不能以一朝居（6）。」

（校1）楠本本は「得」を欠く。

（校2）楠本本は「求不見得、舍不見失」を「不求、不見失」に作る。

（1）四端 『孟子』公孫丑上「惻隱之心、仁之端也。羞惡之心、義之端也。辭讓之心、禮之端也。是非之心、智之端也。人之有是四端也、猶其有四體也」。

（2）的見 しっかりと見極める、確かに見る。卷一五・53条（二九三頁）「吾友還曾平日的見其有此心、須是見得分明、則知可致」。

（3）堯舜是可爲 『孟子』告子下「曹交問曰、人皆可以爲堯舜、有諸。孟子曰、然」。

（4）求則得之、舍則失之 『孟子』告子上「仁義禮智、非由外鑠我也、我固有之也、弗思耳矣。故曰、求則得之、舍則失之」。

（5）謝上蔡於明道前舉史書成文く上蔡發汗 『上蔡語錄』卷中・46条「明道見謝子記問甚博曰、賢却記得許多、可謂玩物喪志。謝子被他折難、身汗面赤。先生曰、只此便是惻隱之心」。『外書』卷十二・45条、46条（四二七頁）に原型が見られる。「玩物喪志」は『尚書』旅獒の語。

(6) 不能以一朝居 『孟子』告子下「由今之道、無變今之俗、雖與之天下、不能一朝居也」。

【一一八・25】

徳粹（滕璘）にお訊ねになった。

朱子「ここ数日、何に取り組んでいるのかね。」

滕璘「『孟子』告子篇を読んでいます。」

朱子「どう理解した。」

滕璘「（書物の上で）もちろん理解しなければなりませんが、やはり物事の上でも理解しなければならないと存じます。」

朱子「物事を行う上で理解しなければならないのはもちろんだが、何事もない時でも取り組まねばならない。先人の書物を読んだり、静坐をしたりする時でも、理解すべきことはあるのだ。」

さらに私（鄭可学）にお訊ねになった。

朱子「君はどう理解したかね。」

鄭可学「『孟子』の「操」と「捨」との二つの区別が明確になってきました。」

朱子「操」と「捨」はもちろんだが、まずはその根本を理解しなければならない。そうでなければ「操れば則ち存す」はずの時に、もう「舎^すつれば則ち亡^{うしな}ふ」になってしまっているであろう。」

朱子「前に話した（『論語』の）「朋有り、遠方より來たる」については、どう理解したかね。」

鄭可学「先に申し上げたことは間違っておりまして。「朋有り、遠方より來たる」のは、（程頤が解釈しているように）善は人に及ぼすに値するものだということです。善を人に及ぼすことができれば、相手と自身とは一つになり、「樂」しくないはずはありません。」

朱子「それは、人に及ぼすべきだということか、それとも、もう及ぼしているということか。」

鄭可学「人に及ぼすべきものであるが故に、及ぼせるのです。」

朱子「楽しいのは、人に及ぼすべきだから楽しいのか、及ぼしたから楽しいのか。」

鄭可学「及ぼしたから楽しいのです。」

朱子「その通りだ。伊川（程頤）の解釈が説き尽くしているのに、後の諸氏が解釈を変え、朋友の講習（議論を通じて学習）だから楽しいなどと言う。自分がまだ理解してもいないのに、誰がわざわざ遠くからやってくるようか。つまり、学問の道は天下公共のもので、自分が理解できたのなら、必ず人に及ぼさなければならぬということだ。（人）知らずして愠いきどほらず」は、徳を成した君子でなければできないことだ。「愠」は怒るという意味ではない。君子より下の人間は、人が自分のことを知らなければ、やはり胸中穏やかではいられない。」

問德粹「數日作何工夫。」曰「讀告子。」曰「見得如何。」曰「固是要見、亦當於事上見之。」曰「行事上固要見、無事時亦合理會。如看古人書、或靜坐、皆可以見。」又問某「見得如何。」曰「只是操捨（一）二

字分判。」曰「操捨固是、亦須先見其本。不然、方操而則存時、已捨而則亡矣。」又問「前說有朋自遠方來（2）、看見如何。」曰「前日說不是。有朋自遠方來、乃是善可以及人（3）。善可以及人、則合彼己爲一、豈不樂。」先生曰「此是可以及人。爲或已及人。」曰「惟其可以及人、所以能及人。」先生曰「樂是可以及人而樂。是已及人而樂（校1）。」曰「已及人而樂。」先生曰「然。伊川說已盡、後來諸公多變其說、云朋友講習（4）。我若未有所得、誰肯自遠方來。要之、此道天下公共、既已得於己、必須及於人。不知而不愠、非君子成德不能。愠、非怒之謂（5）。自君子以降、人不知己、亦不能無芥蒂於胸中。」

（校1）楠本本是「是已及人而樂」を欠く。

（1）操捨 『孟子』告子上「孔子曰、操則存、舍則亡。出入無時、莫知其鄉。惟心之謂與」。

（2）前說有朋自遠方來 22条参照。

（3）善可以及人 『論語集注』に引く程頤の説。『河南程氏經說』卷六（一一三三頁）「以善及人而信從者衆、可樂也」。

（4）後來諸公多變其說、云朋友講習 卷二〇・36条（四五二頁。滕璘錄）「程氏云、以善及人而信從者衆、故樂。此說是。若楊氏云與共講學之類、皆不是。我既自未有善可及人、方資人相共講學、安得有朋自遠方來」。楊時の説は、『論語精義』に見える。「有朋自遠方來、學者以其類至也。合志同方、相與講學、故樂。夫孔子以學不講爲憂、則講學之樂、可知矣」。

（5）不知而不愠、非怒之謂 『論語』学而「人不知而不愠、不亦君子乎」。『集注』「愠、含怒意。君子、

成德之名」。卷二〇・47条（四五四頁）「不愠、不是大故怒、但心裏略有些不平底意思便是愠了」。

【一一八・26】

朱子「最近どうだね、何か解ったかね。」

鄭可学「気持ちが途切れた時に、呼び覚ますということがどういふことかよく解りました。」

朱子「一層、注意してゆきなさい。」

先生問「近日所見如何。」某對「問（校1）斷處頗知提撕（1）。」曰「更宜加意。」

（校1）楠本本は「問」を「問」に作る。

（1）提撕 意識を喚起すること。心と呼び覚ますこと。「敬」を説く際に頻用される。卷十八・51条（四〇二頁）「只一箇持敬、也易得做病。若只持敬、不時時提撕著、亦易以昏困。須是提撕、才見有私欲底意思來、便屏去。且謹守著、到得復來、又屏去。時時提撕、私意自當去也」。

【一一八・27】

朱子「最近どうだね。」

鄭可学「かなり心が定まってきたように感じます。」

朱子「どのように心が定まるのかね。」

鄭可学「何事もない時はいつもかえって散漫になってしまいましたが、何かがあれば、その都度、心を求めます。今は以前よりだいぶよくなりました。」

朱子「どんな書物を読んでいるのかね。」

鄭可学「『孟子』の告子篇です。昨日、「夜氣」の説までに読み、問題は全て自分のこの心にあると感じました。」

朱子「そこまで言わずとも、生き生き躍動する意味があることを理解してこそよいのだ。」

この日、徳粹（滕璣）はさらに小学についても話した。

朱子「徳粹はつまるところ道理に暗く気持ち弱い。子上（鄭可学）はまだ粗雑だ。もっと気をつけなさい。」

先生問「近日如何。」曰「頗覺心定。」「如何心定。」曰「每常遇無事、却散漫。遇有事、則旋求此心。今却稍勝前。」曰「讀（校1）甚書。」曰「讀告子、昨讀至夜氣之說（1）、因覺病痛全在此心上。」曰「亦未說至此、須是見得有踴躍（2）之意、方可。」是日徳粹又語小學。先生曰「徳粹畢竟昏弱。子上尚雜、更宜加意。」

〔校1〕楠本本は「讀」を欠く。

（1）夜氣之說 『孟子』告子上「梏之反覆、則其夜氣不足以存。夜氣不足以存、則其違禽獸不遠矣」。

（2）踊躍 卷六〇・156章（一四五四頁）「躍如、如踊躍而出、猶言活潑潑地也」。

（24）27条担当 阿部 光麿

【一一八・28】

鄭可学「剛毅果斷であつても度が過ぎている人がいますが、いかがでしょうか。」

朱子「それはただ、（軟弱であるよりは）その方がましであり、剛は結局は柔に勝ると考えるがゆえに、ひたすら剛であろうとするからだ。しかし周子は、「剛の善が義となり、直となり、果斷となり、強固な意志となり、堅く持することとなる。剛の悪が猛進となり、狹隘さとなり、無鉄砲となる」と言っている。このように区別しなければいけない。」「滕璘の記録。滕璘「孫吉甫（枝）が、性が剛毅であつても過失のあることを免れ得ないと述べておりましたが、いかがでしょうか。」先生は『通書』の「剛善・剛惡」をとりあげておっしゃった。朱子「もちろん剛毅であることは、愚かで弱い人と較べれば勝っている。しかし、これはただその方がましだというだけで、結局は剛毅であるだけでは不十分なのだ。」「

鄭可学「どうすればそれを制御して、善きものにすることができのでしょうか。」

朱子「ほどよい中庸のところで剛毅さを求めなければならない。」

鄭可学「昨日ご教誨いただいた矯激ということについて、帰ってから考えてみました。長厚（勿体ぶった慎重さ）たらんと努めるのはもちろんよくありません。しかし程氏は人に、顔子の渾厚（こだわりがなくおおらか）を学ばなければならぬと教えています。昨今の弊害を見えますと、この（長厚と渾厚の）真偽が異なるのではないでしょうか。」

朱子「その通りだ。顔子は渾厚であつたが、今の人はびくびく萎縮していて、大きく異なっている。たとえば役人となつたならば、必ず是非を弁別し、進退を明らかにしなければならぬ。いま何かに取り組みながら、事が危ういことになつたからといって、厄介を避けて「私は渾厚だ」などと言つて済まされようか。たとえば後漢の賢人たちは宦官と争つていたが、冀州の刺史（河北地方の責任者）となり、宦官の親族が自分の管轄内で害悪を働いていたとしたら、どうしてその職を辞さないでおられようか。どうしてそれを矯激だと責められようか。当然、その宦官のもとで官には就くべきではないのだ。だから、（孟子が）「古人は尊を辞して卑に居り、富を辞して貧に居る（古人はどうしても出仕しなければならないのであれば、尊い位を辞して低い位に甘んじ、富貴を辞して貧賤に安んじた）」というように、低い位にあれば権勢家とぶつかることもなく、彼らと争つても成し遂げなければならないような職責もないのだ。」

符舜功（叙）「陳寔が（自らがその専横を批判した）宦官の（父親の）喪を弔つたことなどは、大いに渾厚であつたと思います。」

朱子「その通りだ。」

鄭可學「范滂の一派などは、やりすぎでしょう。」

朱子「彼はただその職分を果たしただけだ。だいたい義理（正しい道理）のあるところ、行なうべき時に行なうだけで、渾厚だとか、矯激だとかが関係なくなるようであればいけない。」

私（鄭可學）はまた質問した。

鄭可學「李膺がせつかくの恩赦の後で殺されるようなことをせざるを得なかったのは、天理に従わざるを得なかったということでしょうか。」

朱子「その通りだ。士たるもの不幸にして乱世に遇えば、必ずしも出仕することはない。趙台卿（趙岐）は（宦官の追跡を逃れるため）杜子賓の邸宅の二重壁のなかで数年過ごしたし、（董卓の要請にしぶしぶ仕官した）蔡邕さいようなども、そうするほかわが身の信条を保つことができなかったのだ。」

問「人有剛果（1）過於中、如何。」曰「只爲見彼善於此、剛果勝柔、故一向（校1）剛。周子曰、剛善爲義、爲直、爲斷、爲嚴毅、爲幹固。惡爲猛、爲隘、爲強梁（2）。須如此別、方可。」「璘録云「問、孫吉甫說、性剛未免有失、如何。先生舉通書云、剛善、剛惡、固是剛。比之暗弱之人爲勝、然只是彼善於此而已。畢竟未是。」問「何以制之使歸於善。」曰「須於中求之。」問「昨日承先生教誨矯激事（3）、歸而思之。務爲長厚（4）固不可。然程氏教人却云、當學顏子之渾厚（5）。看近日之弊、莫只是真偽不同。」曰「然。顏子却是渾厚、今人却是聶夾（6）、大不同。且如當官、必審是非、明去就。今做事至於危處、却避禍、曰吾爲渾厚、可乎。且如後漢諸賢與宦官爲敵、既爲冀州刺史、宦官親戚在部內爲害、安得不去之。安得謂之矯

激。須是不做它官。故古人辭尊而居卑、辭富而居貧（7）、居卑則不與權豪相抗、亦無甚職事。」符舜功云「如陳寔弔宦官之喪（8）、是大要渾厚。」曰「然。」某問「如范滂（9）之徒、太甚。」曰「只是行（校2）其職。大抵義理所在、當爲則爲、無渾厚、無矯激、如此方可。」某又問「李膺赦後殺人（10）、莫不順天理。」曰「然。士不幸遇亂世、不必仕。如趙臺卿乃於杜子賓夾壁中坐過數年（11）、又如（校3）蔡邕（12）、更無整身處。」

（校1）底本是校注において陳本に従つて「一向」に改めたことを記す。

（校2）楠本本は「行」の後に「其行」が入る。

（校3）楠本本は「如」の字を欠く。

※卷一二二・44条（二九五八頁）は同一場面の別記録。

（1）剛果 剛毅果斷。卷十三・110条（二三九頁）「須是慈祥和厚爲本。如勇決剛果、雖不可無、然用之有處所」、卷六・52条（二〇五頁）「説仁、便有慈愛底意思。説義、便有剛果底意思。聲音氣象、自然如此」。

（2）周子曰「爲強梁 『通書』師第七「或問曰、曷爲天下善。曰、師。曰、何謂也。曰、性者剛柔善惡中而已矣。不達。曰、剛善爲義、爲直、爲斷、爲嚴毅、爲幹固。惡爲猛、爲隘、爲彊梁。柔善爲慈、爲順、爲異。惡爲懦弱、爲無斷、爲邪佞。惟中也者、和也、中節也、天下之達道也、聖人之事也。故聖人立教、俾人自易其惡、自至其中而止矣」。

(3) 昨日承先生教誨矯激事 卷一二・44条(二九五八頁)「鄭子上問、昨日所說浙中士君子多用回互

以避矯激之名、莫學顏子之渾厚否。曰、渾厚自是渾厚。今浙中人只學一般回互底心意、不是渾厚。渾厚
是可做便做、不計利害之謂。今浙中人却是計利害太甚、做成回互耳、其弊至於可以得利者無不爲。如陳
仲弓送宦者葬、所謂有仲弓之志則可、無仲弓之志則不可」、同・43条「……又說、固是矯激者非。只是
不做矯激底心、亦是私意。大凡只看道理合做與不合耳、如合做、豈可避矯激之名而不爲」。

(4) 長厚 つつしみ深く慎重、誠実でまじめ、勿体ぶっている。卷二四・33条(五七四頁)「曰、這也
爲常人說、聖人固不用得如此。然聖人觀人、也著恁地詳細。如今人說一種長厚說話、便道聖人不恁地、
只略略看便了」、卷八〇・36条(二〇七四頁)「伯恭凡百長厚、不肯非毀前輩、要出脫回護」。

(5) 程氏教人却云、當學顏子之渾厚 『遺書』卷十八・70条(一九七頁)「孟子却寬舒、只是中間有些
英氣、纔有英氣、便有圭角。英氣甚害事。如顏子便渾厚不同。顏子去聖人、只毫髮之間。孟子大賢、亞
聖之次也」。注(3) 参照。

(6) 聶夾 未詳。ここでは上文の「長厚」の反対義で解釈した。

(7) 辭尊而居卑、辭富而居貧 『孟子』万章下「孟子曰、仕非爲貧也、而有時乎爲貧。娶妻非爲養也、
而有時乎爲養。爲貧者、辭尊居卑、辭富居貧。辭尊居卑、辭富居貧、惡乎宜乎」。

(8) 陳寔弔宦官之喪 陳寔、字は仲弓、後漢の人。宦官の專横を批判し、党錮の禁に処せられた。しか
し、宦官張讓の父の葬儀においては、名士のなかで陳寔だけが参列した。『後漢書』卷六二・陳寔伝「時
中常侍張讓權傾天下。讓父死、歸葬潁川、雖一郡畢至、而名士無往者、讓甚恥之、寔乃獨弔焉。乃後復

誅黨人、讓感寔、故多所全宥」。注（3）参照。

（9）范滂 字は孟博、後漢の人。宦官派による弾圧に際し、母や郷里に迷惑がかからないよう自ら出頭し刑死した。『後漢書』卷六七党錮列伝・范滂伝「建寧二年、遂大誅黨人、詔下急捕滂等。督郵吳導至縣、抱詔書、閉傳舍、伏牀而泣。滂聞之、曰、必爲我也。即自詣獄」。

（10）李膺赦後殺人 李膺、字は符礼。後漢の人。大赦の後に朝廷に復帰するも、宦官を誅せんと謀り、殺された。『後漢書』卷六七党錮列伝・李膺伝「時河内張成善說風角、推占當赦、遂教子殺人。李膺爲河南尹、督促收捕、既而逢宥獲免、膺愈懷憤疾、竟案殺之」。

（11）趙臺卿乃於杜子賓夾壁中坐過數年 趙岐、字は邠卿、また台卿。後漢の人。宦官を批判し、一族が殺されるも一人逃げのび、孫嵩の邸宅の二重壁のなかで数年にわたって匿われた。本条では趙岐を匿った人物を杜子賓とするが、『後漢書』には孫嵩（字は賓石）とある。『後漢書』卷六四・趙岐伝「孫嵩藏岐複壁中數年、岐作扃屯歌二十三章」。

（12）蔡邕 字は伯喈。後漢の人。董卓に招聘され、やむを得ずに出仕。後、董卓が誅殺されると王允の怒りを買ひ、黥首・刎足の刑を受けてでも漢史の編纂を続けさせて欲しいと願うも許されず、獄死した。『後漢書』卷六〇。

朱子「君は以前、曾大卿（曾逢）と交遊があつたそうだが、どんなことを議論したのかね。」

鄭可学「曾先生は寡黙で言葉少なく、聞くべき言葉は一つ二つありましたが、その実践には及ばないものでした。」

朱子「曾卿が家を齊え我が身を正し、人の見ていないところでも常に身をつつしんでおられたことは、誠に及びがたいものだ。」

問「吾友昔從曾大卿（1）游、於其議論云何。」曰「曾先生靜默（校1）少言、有一二言不及其躬行者。」曰「曾卿齊家正身、不欺暗室（2）、真難及。」

（校1）朝鮮整版・楠本本は「默」を「嘿」に作る。

（1）曾大卿 曾逢、字は原伯。曾幾の長子。『資料索引』四卷二八〇一頁、『学案』卷三四、『宋史』卷三八二。

（2）不欺暗室 人の見ていないところでも表裏なく、不善を行わないこと。『外書』卷一・11条（三五一頁）「君子敬以直内、義以方外、爲學本。默而識之、吾不得而見之矣、得見善問者斯可矣。治其器必求其用、學道者當如何爾。學始於不欺暗室」。駱賓王「螢火賦」「類君子之有道、入暗室而不欺」。

鄭子上（可学）が科挙のため京師へと赴く途次に訪れ、『左伝』に関するいくつかのことを質問した。

朱子「ここ数年、君と会わなかったので、新たな疑問でもあつて啓発しあえるのかと思つたら、このようなどうでもよいことを質問してきて、いったい何の益があるのだ。もし『大学』『論語』『孟子』『中庸』の四書を徹底して突きつめて明確に理解したならば、経伝の中のどんな重大なことであっても、理によつて類推していけば、分らないものなどない。ましてそのような些事は言うまでもないことだ。そんなふうでは、「甘い桃樹を颺^{あま}了し、山に沿うて醋梨を摘む（甘い桃の樹を捨てて、山に沿つて酸っぱい梨をもぎ取る）」ようなものと言えよう。」

〔郭友仁〕

鄭子上因赴省經過、問左傳數事（1）。先生曰「數年不見公、將謂有異問相發明、却問這般不緊要者、何益。人若能於大學語孟中庸四書窮究得通透、則經傳中折莫（2）甚大事、以其理推之、無有不曉者。況此末事。今若此、可謂颺了甜桃樹、沿山摘醋梨（3）也。」

〔友仁〕

（1）問左傳數事 本条と卷二二・75条（二九三八頁、記錄者・沈憫）の冒頭部分は同一場面の記録か。

「或問左傳疑義。曰、公不求之於六經語孟之中、而用功於左傳。且左傳有甚甚麼道理。縱有、能幾何。

所謂棄去甜桃樹、緣山摘酷梨……」。

（2）折莫 たとえゝでも、ゝにかかわりなく。また「折末」「折麼」に作る。

(3) 颺了甜桃樹、沿山摘醋梨 黃庭堅『山谷集』卷十五「贈劉靜翁頌四首」其一「念念皆空更莫疑、心

王本自絶多知、艱難長向途中覓、掉却甜桃摘酸梨」。注(1) 参照。

【一一八・31】

私(滕璘)が鄂渚(湖北省武昌)の教官の欠員に任命された時のことである。

朱子「私はいつも人に県丞(県の副知事)にでもなった方がましだと勧めている。それならまだしも世の中に恩恵を与えることもできよう。教官になるのはつまらない。義理(正しい道理)を説いても人は信じないし、それぞれの力量に応じて試験を課した時だけ活気づく。」 [以下、滕璘への訓誡。]

璘注鄂渚教官闕(1)。先生曰「某嘗勸人、不如做縣丞、隨事猶可以及物(2)。做教官沒意思、說義理人不信、又須隨分做課試、方是開熱(3)。」 [以下訓璘。]

(1) 注鄂渚教官闕 「注闕」は、役職の欠員に任命されること。

(2) 及物 自分以外の人やものに恩恵を及ぼすこと。『遺書』卷十一・78条「以己及物、仁也。推己及物、恕也」。

(3) 開熱 活気がある、にぎやか、威勢がいい。卷一三七・74条(三二七五頁)「李德之言、東坡晚年

却不衰。先生曰、東坡蓋是夾雜些佛老、添得又鬧熱也」。

【一一八・32】

朱子「どんなことに努めているのかね。」

私（滕璘）はまだ何もしていないとお答えした。

朱子「努力して学び、質問すべき疑問があるのであれば、議論もしやすい。しかし、努力もせずただ学問の要点だけを言っているようでは、他日どうして議論ができよう。以前、何かあればすぐに発憤して議論したが、でたために経書や古人の言葉を用いては議論する類の者たちを見たが、全く意味のないものであった。その一方で、全く学問議論に努めない類の者たちもいるが、なおさら議論のつかかりがない。それならばまだでたためにでも頑張っている方がましで、まだしも議論できる余地があるというものだ。たとえば、古人のことを論じるのに、論じ方が誤っていたとしても、古人の事績を一通り考えたことには違いない。他日、正しく説明して、それまでの誤りを改めたとしたら、有益であろう。」

問「做何工夫。」璘對以未曾。曰「若是做得工夫、有疑可問、便好商量（1）。若未做工夫、只說得一箇爲學大端（2）、他日又如何得商量。嘗見一般朋友、見事便奮發要議論、胡亂將經書及古人作議論、看來是沒意思。又有一般全不做功夫底、更沒下手商量處。又不如彼胡亂做工夫、有可商議得。且如論古人、便是論

錯了、亦是曾考論古人事迹一過。他日與說得是、將從前錯底改起、便有用。」

- (1) 好商量 議論がしやすい。話が早い。卷一一六・33条(二七九八頁)「祖道又曰、頃年亦嘗見陸象山。先生笑曰、這却好商量。公且道象山如何」、同・37条(二七九九頁)「歸去各做工夫、他時相見、却好商量」、卷十一・8条(一七七頁)「讀書須將心貼在書冊上、逐句逐字、各有着落、方始好商量」。
- (2) 爲學大端 学問の要点、学問のあらまし。次に続く33条、34条、37条でも繰り返し話題になっている。

(28) 32条担当 松野 敏之

【一一八・33】

学問の根本的なあらましをお尋ねした。

朱子「たとえば士が科擧に合格しようとするのは、どうしても官職に就きたいからだ。だからこそその努力は猛烈で、いつもいつも心にかけて片時も忘れることがないように努力して、やっと成就できるのだ。学問においても、目標を立てて、何がなんでも学問をしようとしなければならぬ。この志をいつもいつも忘れることがなければ、自ずと修養が進むのだ。そもそも人はこの小さな体でもって、三才として天と地と並び立っている。この肉体がなぜ天地に匹敵できるのか、常に考えなさい。天地が我々に賦与したものは、あ

らゆる面で完全なものなのに、人は自らそれを損なってしまったっているのだ。」

問爲學大端（1）。曰「且（校1）如士人應舉、是要做官。故其功夫勇猛、念念不忘、竟能有成。若爲學、須立箇標準、我要如何爲學。此志念念不忘、功夫自進。蓋人以眇然之身、與天地並立而爲三。常思我以血氣之身、如何配得天地。且天地之所以與我者、色色周備、人自污壞了。」

（校1）楠本本は「且」を小字で記す。

（1）爲學大端 前の32条、及び次の34条、37条参照。なお、本条と次の34条は、15条と同一場面の別記録。卷一一八・15条参照。

そこで『孟子』の「万物みな我に備はる。身に反りて誠なれば、楽しみこれより大なるは莫し」の一章を挙げて、

朱子「いま学問を行う際には、当初の状態を取り戻し、天が我々に与えてくれたものを完全に發揮するようになければならない。そして、天が我々に与えてくれたものを完全に發揮しようとするならば、聖賢を目標としなければならない。聖賢のレベルに至ってこそ、本来のものを損なうことなく完全に發揮できたということなのだ。このように考えれば、その努力は自ずと勇猛なものになるはずだ。事に臨む時にも書物を

読む時にも常にこの心構えでいれば、自然に途切れることはない。もし当初の状態を取り戻そうとする志もなく、必ず聖賢になつてやるといふ心構えもないようであれば、そのうちだらだらしてだめになつていくだけだ。」

因舉萬物皆備於我、反身而誠、樂莫大焉一章（1）。「今之爲學、須是求復其初（2）、求全天之所以與我者、始得。若要全天之所以與我者、便須以聖賢爲標準、直做到聖賢地位、方是全得本來之物而不失。如此、則功夫自然勇猛。臨事觀書常有此意、自然接續。若無求復其初之志、無必爲聖賢之心、只見因循（3）荒廢（4）了。」

（1）萬物皆備於我、樂莫大焉一章 『孟子』尽心上「孟子曰、萬物皆備於我矣、反身而誠、樂莫大焉。

強恕而行。求仁莫近焉。」

（2）復其初 『論語集注』学而冒頭の注「人性皆善、而覺有先後、後覺者必効先覺之所爲、乃可以明善而復其初也」、「大学章句」『明明德』の注「明德者、人之所得乎天、而虛靈不昧、以具衆理而應萬事者也。但爲氣稟所拘、人欲所蔽、則有時而昏、然其本體之明則有未嘗息者。故學者當因其所發而遂明之、以復其初」。なお、「復初」という発想は、『莊子』繕性篇、『淮南子』俄真訓に見える。

（3）因循 22条注（1）参照。

（4）荒廢 （学業などが）なおざりにした結果、だめになる。卷一三九・119条（三三二頁）「筆路則

常拈弄時、轉開拓。不拈弄、便荒廢」。

『孟子』の「孟子、性善を道ふ、言へば必ず堯舜を称す」の一章を挙げて、

朱子「性善を道ふ」というのは、天が我々に与えてくれたものを言っているものであり、堯舜を手本にしている。人の性は善であり、誰もが皆堯舜になれると言うことで、規準が立ったのだ。そして、下文に成覲・顔淵・公明儀らの言葉を引いて、聖賢は必ずなれるものだということを明らかにしたのだ。末尾の「もし藥瞑眩せざれば、その疾瘳へず」という一文は、最もうまい表現だ。人が聖賢になろうとするならば、目眩を起こすほどの劇薬を一念発起して服用するようであればならない。ひとたび痺れを感じた後で、それが落ち着いてくれば、病は自然に癒えているものだ。」

因舉孟子道性善、言必稱堯舜一章（1）、云「道性善、是說天之所以與我者、便以堯舜爲樣子。說人性善、皆可以爲堯舜、便是立箇標準了。下文引成覲顔淵公明儀之言、以明聖賢之可以必爲。末後若藥不瞑眩、厥疾不瘳、最說得好。人要爲聖賢、須是猛起服瞑眩之藥相似。教他麻（校1）了（1）了（2）了、及其定疊（3）、病自退了。」

（校1）朝鮮整版は「麻」を「磨」に作る。

(1) 孟子道性善、言必稱堯舜一章 『孟子』滕文公上「滕文公爲世子、將之楚、過宋見孟子。孟子道性

善、言必稱堯舜。世子自楚反、復見孟子。孟子曰、世子疑吾言乎、夫道一而已矣。成覿謂齊景公曰、彼

丈夫也、我丈夫也。我何畏彼哉。顏淵曰、舜何人也、予何人也。有爲者亦若是。公明儀曰、文王我師也。

周公豈欺我哉。今滕絕長補短、將五十里也、猶可以爲善國。書曰、若藥不瞑眩、厥疾不瘳」。

(2) 一上 ひとたび。一度。卷一一八・86条(二八五九頁)「子好說禪、何不試說一上」。

(3) 定疊 落ちていている、穩当、妥当。卷十三・60条(二三〇頁)「只是世間不好底人、不定疊底事、才遇堯舜、都安帖平定了」、卷十四・143条(二七五頁)「今人心巾揺漾不定疊、還能處得事否」。

また、『論語』の「顔子が(孔子を評して)「之を仰げば彌いよいよ高し」とした一段を挙げて、

朱子「学問を行うのは、(国土の)恢復を論じることによく似ている。たとえば、東南(に追い遣られた今の我が宋)にも多くの財貨と軍事力があり、今のままでも問題なく暮らすことはできるのに、なぜ恢復を目指す必要があるのだろうか。それはひとえに、祖宗が本来持っていたものは取り戻さなくてはならないからだ。これを取り戻さなくては、結局はすまされない。最近の人たちの学問ときたら、(孟子のいう)「彼、此より善し(その方がましだ)」というように、分相応の好人となるだけで満足してしまっているが、どうして聖賢にならなくてはならないのか。それはひとえに、天が我々に与えてくれたものは必ず取り戻さなくてはならず、これを取り戻さなくては、そのままでは終われないからだ。だから学問を論じる場合に

は、聖賢を規準にしなければならない。つまり、学問は天命として与えられた本来の性に復帰し、その究極の境地である聖賢に至ることを求めなければならないのであり、それでこそ学問なのだ。

「鄭可學の記録。世間の人が言うように、とりあえず三割五割の程度の人物になろうというので、何のまずいことがあるのだろうか。なぜ朝から晩まで努め励む必要があるのか。それはひとえに、自分は本来一箇の性を持っていて、それはきわめて善きものであったのだから、その本来のものを取り戻さなければならないということだ。本来のものを取り戻さなければ、結局は欠落しているということだ。このことこそ、聖人たちが脈々と伝えてきたことであり、鉄杭をしっかりと打ち立てたように、決して動かせないことなのだ。」しかし、これは学問の根本的なあらましがこうだということで、その間、読書をして古今のことを考察するなど、学問修養は何事にも取り組まなければいけない。」

又舉顔子仰之彌高一段（1）。又說「人之爲學、正如說恢復（2）相似。且如東南亦自有許多財賦、許多兵甲、儘自好了、如何必要恢復。只爲祖宗元有之物、須當復得。若不復得、終是不了。今人爲學、彼善於此（3）、隨分做箇好人、亦自足矣。何須必要做聖賢。只爲天之所以與我者、不可不復得。若不復得、終是不了。所以須要講論學、以聖賢爲準。故問學須要（校1）復性命之本然、求造聖賢之極、方是學問。」「可學錄云「如尋常人說、且作三五分人、有甚不可。何必須早夜孳孳。只爲自家元有（校2）一箇性、甚是善、須是還其元物。不還元物、畢竟欠闕。此一事、乃聖人相傳、立定一鐵椿、移動不得。」然此是大端如此。其間讀書、考古驗今、工夫皆不可廢。」

(校1) 正中書局本・朝鮮整版は「要」を「是」に作る。

(校2) 正中書局本・朝鮮整版は「有」を「初」に作る。

(1) 顔子仰之彌高一段 『論語』子罕「顔淵喟然歎曰、仰之彌高、鑽之彌堅、瞻之在前、忽焉在後」。

(2) 恢復 卷一三三・38条(三一九六頁) 以下に、宋の国土の恢復を論じる条がまとまってみえる。 45

条(三二〇頁)「恢復之計、須是自家喫得些辛苦、少做十年或二十年、多做三十年。豈有安坐無事、

而大功自致之理哉」、46条(同)「今五六十年間、只以和爲可靠、兵又不曾練得、財又不曾蓄得、說恢

復底、都是亂道耳」。

(3) 彼善於此 その方がましだ、比較的よい。『孟子』尽心下「孟子曰、春秋無義戰。彼善於此、則有之矣」。

関連して「徳性を尊びて問學に道る」の一章を挙げて、

朱子「ある人たちは「天が我々に与えてくれたものは、ひとえに光り輝く混じり気のない良きものであり、後に良くなってしまうのは、人がそれを損なうからだ。自分の學問はその損なう原因を取り除くことであり、それを完全に取り除けば、それで終わりだ」などと言っている。こういった(偏った考え方の)弊害たるや、學問を無みし、読書をせず、事に臨んで大筋はよくとも、そこに見出す道理に偏ったところがある

という始末だ。學問は、天から与えられたものを恢復して必ず聖賢にならなければならないという根本を知った上は、(孟子のいう)「父子に親有り、君臣に義有り、夫婦に別有り、長幼に序有り、朋友に信有り」の五箇条を五本の太い杭のようにして、いつもいつも心にかけて取り組むようにすれば、なすべきことはいつでもある。だから『大学』の「至善に止まるに在り」の箇所にも、ただ「人君と為りては仁に止まり、人臣と為りては敬に止まり、人子と為りては孝に止まり、人父と為りては慈に止まり、国人と交はりては信に止まる」とあるのだ。」

因舉尊德性而道問學一章(1)。又云「有一般人、只說天之所以與我者、都是光明純粹好物。其後之所以不好者、人爲(校1)有以害之。吾爲學、只是去其所以害此者而已。害此者盡去、則工夫便了。故其弊至於廢學不讀書、臨事大綱雖好、而所見道理便有偏處。爲學既知大端是欲復天之所與而必爲聖賢、便以父子有親、君臣有義、夫婦有別、長幼有序、朋友有信(2)。此五者爲五箇大樁相似、念念理會、便有工夫可做。所以大學在止於至善(3)、只云爲人君止於仁、爲人臣止於敬、爲人子止於孝、爲人父止(校2)於慈、與國人交止於信(4)。」

(校1) 正中書局本・朝鮮整版は「爲」を「偽」に作る。

(校2) 楠本本は「止」を「爲」に作る。

(1) 尊德性而道問學一章 『中庸』(章句二七章)「故君子尊德性而道問學、致廣大而盡精微、極高明

而道中庸」。

(2) 父子有親、君臣有義、夫婦有別、長幼有序、朋友有信 『孟子』滕文公上「聖人有憂之、使契爲司徒、教以人倫。父子有親、君臣有義、夫婦有別、長幼有序、朋友有信」。

(3) 大學在止於至善 『大學』(章句經一章)「大學之道、在明明德、在親民、在止於至善」。

(4) 爲人君止於仁、與國人交止於信 『大學』(章句伝三章)「詩云、穆穆文王、於緝熙敬止。爲人君

止於仁、爲人臣止於敬、爲人子止於孝、爲人父止於慈、與國人交止於信」。

(33条担当 江波戸 互)

【一一八・34】

朱子「以前学友たちがこちらにやって来たとき、千里を遠しとせずして来てくれたのだから、学問の方向性は分かっているものだと思います、それぞれの分に応じて学問のあらましを語ったが、どうもまったくものにならなかったようだ。これは私の罪である。今になって思うに、学ぶ者は志を立てることを大本としなければならぬ。昨日話したように、学問の根本は天から命じられた本来の性に立ち返り、その極致たる聖賢になることを求めるといふことであり、そのように志を立てて、そのように実践していかなければならないのだ。もしも自分の志はよい人になることを求めるだけだと言い、いくらか道理が分かればそれでやめてしまふようでは、学問修養が進歩せず、日々しだいに(本来持っていた善いものが)消えてなくなってしまうの

も当然というものだ。いま、よくよく考えてみなさい。天が我々に与えてくれたものは、必ずや光明正大なるものに違いないのだから、決してそのまま（見失ったまま）にしておくべきではなく、自分に与えられた性に応じて十分に發揮して実践してゆき、聖賢の境地にいたるまではやめない、と。このように志を立てたならば、自然にじつとしてはいられず、やるべき修養が見えてくるはずだ。顔子の「罷めんと欲して能はず」、小人の「し擧として利を為す（あくせく利を求める）」などは、いつもいつも心にかけて忘れないということだ。もし志を立てなければ、結局は何にもならない。」

そこで程子の「学ぶ者が氣質に勝てず、習慣的な情性に負けてしまうのは、志の問題だ」という言葉を挙げられた。

また（胡宏の言葉を挙げて）、

朱子「志を立てて根本を定め、居敬によつて志を保持するとあるが、これは五峰（胡宏）の議論のよいところだ。」

また、以下のことを挙げられた。

『孟子』「士は志をたか尚くす。何を志を尚くすと謂ふ。曰く仁義のみ。（士たる者、志を高くしなければならぬというが、志を高くするとはどういうことか。仁義を志すということに他ならない。）」

『孟子』「舜、法を天下に為し、後世に伝ふべし。我れ猶ほ未だ郷人たるを免れざるなり、是れ則ち憂ふべきなり。之を憂ふに如何せん、舜の如くするのみ（舜は人倫の法を天下に広め、後世に伝えることができた。しかし私はいまだなお一介の村人に過ぎず、これは憂うべきことである。ではこれを憂いてどうする

べきなのか。舜のように振る舞うだけである。」

（『論語』）「三軍、帥を奪ふべし、匹夫、志を奪ふべからざるなり（三軍という大軍であっても、総大将を捕縛することはできる。しかし匹夫であつても、その志を奪い去ることはできない。）」

朱子「孔子門下の中で志を立てることができなかった者は、「子の道を説よばざるには非ず、力足らざるなり」といった冉求である。のちに彼が聚斂（重税の取り立て）に志が向いたのも、怪しむに足りない。」

「従前朋友來此、某將謂不遠千里而來、須知箇趣向了、只是隨分爲他說箇爲學大概去、看來都不得力、此某之罪。今日思之、學者須以立志爲本。如昨日所說爲學大端（1）、在於求復性命之本然、求造聖賢之極致、須是便立志如此、便做去始得。若曰我之志只是要做箇好人、識些道理便休、宜乎工夫不進、日夕漸漸消磨。今須思量天之所以與我者、必須是光明正大、必不應只如此而止、就自家性分上儘做得去、不到聖賢地位不休。如此立志、自是歇不住、自是儘有工夫可做。如顏子之欲罷不能（2）、如小人之孳孳爲利（3）、念念自不忘。若不立志、終不得力。」

因舉程子云「學者爲氣所勝、習所奪、只可責志（4）。」又舉云「立（校1）志以定其本、居敬以持其志（5）、此是五峰議論好處。」又舉「士尚志。何謂尚志。曰仁義而已矣（6）。」又舉「舜爲法於天下、可傳於後世、我猶未免爲鄉人也、是則可憂也。憂之如何。如舜而已矣（7）。」又舉「三軍可奪帥、匹夫不可奪志也（8）。如孔門亦有不能立志者、如冉求非不說子之道、力不足也（9）、是也。所以其後志於聚斂（10）、無足怪」。

(校1) 楠本本は、「立」を欠く。

※本条と卷一一八・15条(二八三七頁、記録者は鄭可学)は同一場面の別記録。

(1) 昨日所説爲學大端 前条(33条)の訓戒を指す。

(2) 顔子之欲罷不能 『論語』子罕「顔淵喟然歎曰、仰之彌高、鑽之彌堅、瞻之在前、忽焉在後。夫子

循循然善誘人、博我以文、約我以禮。欲罷不能。既竭吾才、如有所立卓爾。雖欲從之、末由也已」。

(3) 孳孳爲利 『孟子』尽心上「孟子曰、雞鳴而起、孳孳爲善者、舜之徒也。雞鳴而起、孳孳爲利者、

跖之徒也。欲知舜與跖之分、無他、利與善之間也」。

(4) 學者爲氣所勝、只可責志 『遺書』卷十五・96条(一五五頁)。また『近思錄』卷二にも収める。

(5) 立志以定其本、居敬以持其志 胡宏「復齋記」(理學叢書『胡宏集』一五二頁)「格之之道、必立

志以定其本、居敬以持其志」。

(6) 士尚志、曰仁義而已矣 『孟子』尽心上「王子墊問曰、士何事。孟子曰、尚志。曰、何謂尚志。曰、

仁義而已矣」。

(7) 舜爲法於天下、如舜而已矣 『孟子』離婁下。

(8) 三軍可奪帥、匹夫不可奪志也 『論語』子罕。

(9) 如冉求非不說子之道、力不足也 『論語』雍也「冉求曰、非不說子之道、力不足也。子曰、力不足

者、中道而廢。今女畫」。

(10) 其後志於聚斂

『論語』先進「季氏富於周公、而求也爲之聚斂而附益之。子曰、非吾徒也、小子鳴

鼓而攻之、可也」。

【一一八・35】

朱子「天が我々に与えてくれたものを知ろうとするならば、孟子のいう「惻隱の心無きは人に非ざるなり。羞惡の心無きは人に非ざるなり。是非の心無きは人に非ざるなり。辭遜の心無きは人に非ざるなり」などが正に良い例だ。いまの人々でも惻隱や羞惡、是非や辭讓が現われ出ていないわけではないが、ただそれを省察できていない。もし日常においてこの（仁義礼智の）四つの端緒を省察してみれば、はつきりとほとばしり出て来ることがわかるはず、そこでそれをつかまえて大切に養つてゆくことが、努力のきっかけとなる。ただ省察しないから、端緒が現れてもすぐに物欲にかき消されて見失つてしまうのだ。だから永遠不滅の道はいつでも存在するとはいえ、結局はその本来の姿のまま光明正大であることができないのだ。」

又曰「要知天之與我者、只如孟子說、無惻隱之心、非人也。無羞惡之心、非人也。無是非之心、非人也。無辭遜（校1）之心、非人也（1）。今人非無惻隱、羞惡、是非、辭遜（校1）發見處、只是不省察了。若於日用間試省察此四端（2）者、分明迸趨（校2）出來、就此便操存涵養將去、便是下手處。只爲從前不省察了、此端才見、又被物欲汨了。所以秉彝（3）不可磨滅處雖在、而終不能光明正大如其本然。」

(校1) 朝鮮整版は「辭遜」を「辭讓」に作る。

(校2) 正中書局本・和刻本・楠本本は「迸趨」を「迸賛」に作る。朝鮮整版は「迸攢」に作る。

(1) 無惻隱之心、非人也。『孟子』公孫丑上「無惻隱之心、非人也。無羞惡之心、非人也。無辭讓之心、非人也。無是非之心、非人也。惻隱之心、仁之端也。羞惡之心、義之端也。辭讓之心、禮之端也。是非之心、智之端也。人之有是四端也、猶其有四體也」。

(2) 四端 『孟子』公孫丑上「惻隱之心、仁之端也。羞惡之心、義之端也。辭讓之心、禮之端也。是非之心、智之端也。人之有是四端也、猶其有四體也」。

(3) 秉彝 『毛詩』大雅・蒸民「天生烝民、有物有則。民之秉彝、好是懿德」。『孟子』告子上「詩曰、天生蒸民、有物有則。民之秉彝、好是懿德。孔子曰、爲此詩者、其知道乎。故有物必有則、民之秉彝也、故好是懿德」。

【一一八・36】

朱子「考えてみなさい。人はこのちつばけな体で、天地の万物を生み育てる働きに参加することができる。常人であっても聖賢となることができる。わずかな（善き心の現われである）四つの端緒を十分に推し広げていけば、天下を保つことができる。それは何故か。それがはつきりと分かれば、志は自ずと立ち、学問修

養は自ずとやめられなくなるだろう。」

試思人以眇然（校1）之身、可以贊天地之化育。以常人而可以爲聖賢。以四端之微、而充之可以保四海（1）。是如何而致。若分明見此、志自立、工夫自住不得。

（校1）楠本本は、「眇然」を「渺然」に作る。

※卷一一八・15条及び33条参照。

（1）以四端之微、而充之可以保四海 『孟子』公孫丑上「凡有四端於我者、知皆擴而充之矣、若火之始然、泉之始達。苟能充之、足以保四海。苟不充之、不足以事父母」。

（34）36条担当 中嶋 諒

【一一八・37】

朱子「昨日話したように、学問の根本は、志を立て、必ず聖賢になろうとすることにある。これまで（孟子のいう）「人皆以て堯舜と爲るべし（人は誰もが堯舜になれる）」の道理がはつきりと理解できたかね。さらに自分は堯舜になれるのになっていない、その原因がどこにあるのか理解したかね。孟子は「性は善」と言い、「徐行して長に後る（ゆっくり歩いて年長者の後ろに随う）」といったことを言っているが、今の

人でも（善なる性の現われの）四端が折りに触れて現われ出ていないわけではないし、ゆつくりと歩くことができないわけでもない。それなのになぜ堯舜になれていないのか。しばらくよく考えてみなさい。これをはつきりと理解できれば、志は自ずと立ち、学問修養は自ずと止められなくなるはずだ。」

そこで（『論語』の）「徳を執ること弘からず、道を信ずること篤からずんば、焉くんぞ能く有りと為さん、焉んぞ能く亡しと為さん（身を修めても偏狭、道を篤く信じることができないのであれば、いてもいなくても変わらない、取るに足らない人間にすぎない）」を挙げて、

朱子「弘からず」、「篤からず」であつてはものの数には入らず、取るに足らないということだ。」

「昨日所説爲學大端（1）在於立志必爲聖賢。曾看得人皆可以爲堯舜（2）道理分明否。又見得我可以爲堯舜而不爲、其患安在。固是孟子說性善（3）、徐行後長（4）之類。然今人四端非不時發見、非不能徐行、何故不能爲堯舜。且子細看。若見得此分明、其志自立、其工夫自不可已。」因舉執徳不弘、信道不篤、焉能爲有（校1）、焉能爲亡（5）、謂「不弘不篤、不當得一箇人數、無能爲輕重。」

（校1）楠本本は「焉能爲有」を欠く。

※本条と卷一一八・16条（記録者鄭可学）は、同一場面の別記録。

（1）昨日所説爲學大端 卷一一八・15条、33条、34条参照。

（2）人皆可以爲堯舜 『孟子』告子下「曹交問曰、人皆可以爲堯舜、有諸。孟子曰、然」。

(3) 性善 『孟子』滕文公上「孟子道性善、言必稱堯舜」。

(4) 徐行後長 『孟子』告子下「徐行後長者、謂之弟。疾行先長者、謂之不弟。夫徐行者、豈人所不能哉。所不爲也」。

(5) 執德不弘、焉能爲亡 『論語』子張。『集注』「焉能爲有無、猶言不足爲輕重」。卷四九・1条（一九八頁）「問、子張以爲焉能爲有、焉能爲亡。世間莫更有不好人。曰、渠德亦自執、道亦自信、只是不弘不篤、不足倚靠耳」、同・8条（一九九頁）「問焉能爲有、焉能爲亡。曰、有此人亦不當得是有、無此人亦不當得是無、言皆不足爲輕重」。

【一八・38】

朱子「繰り返し自問しなさい。人の性はすべて善であるのに自分の性はその善を現さず、「人皆以て堯舜と爲るべし（人は誰もが堯舜になれる）」とあるのに自分自身はまだ堯舜らしさを現さないのは何故か。繰り返し自問し、恥ずべき点が分かれば、果敢に奮起しなさい。そうすれば志が立つのだ。さらに『孟子』告子篇を繰り返し読めば、「指、人に若かず（指が人並みでない）」などの数章は、必ず成し遂げるのだという志を、奮い起こす助けとなり得よう。」

須常常自問。人人（校1）之性善、而己之性却不見其善。人皆可以爲堯舜（1）、而己之身即未見其所以

爲堯舜者、何故。常常自問、知所愧恥、則勇厲奮發而志立矣。更將孟子告子篇反復讀之、指不若人（2）之類數段、可以助人興發必爲之志（校2）（3）。

（校1）朝鮮整版・正中書局本は「人人」を「云人」に作る。

（校2）楠本本・和刻本は「興發必爲之志」を小字注とする。

（1）人皆可以爲堯舜 『孟子』告子下「曹交問曰、人皆可以爲堯舜、有諸。孟子曰、然」。

（2）指不若人 『孟子』告子上「指不若人、則知惡之。心不若人、則不知惡」。

（3）必爲之志 卷五九・98条（一四〇一頁、本条と同じく藤璘の記録）「若不先明得性善、有興起必爲之志、恐其所謂操存之時、乃舍亡之時也」。卷一一八・33条には「若無求復其初之志、無必爲聖賢之心、只見因循荒廢了」とある。

【一一八・39】

何を読んでいるのかお訊ねになった。私（藤璘）は『孟子』告子篇である旨をお答えした。

朱子「古の人は「詩に興り（詩の吟詠によって奮起し）」、詩は「以て興すべし（発奮させることができる）」と言ひ、さらに「文王無しと雖も猶ほ興る（文王の教えを待たずして奮起する）」と言う。人は必ず成し遂げるのだという心を奮い立たせてこそ、学問に取り組む端緒が得られる。古の人は詩を吟詠して善な

る心を奮い立たせたが、今や古の詩は分らない。だから私は、告子篇の諸章を読めば善き心を奮起させられると思い、人に読むことを勧めている。例えば「義理の我が心を悦ばしむるは、猶ほ芻豢の我が口を悦ばしむるがごとし（正しい道理が私の心を喜ばせるのは、肉が私の口を喜ばせるのと同じである）」とあるが、これを読むならば、義理が自分の心を喜ばすことができるかどうか、それが果たして肉が口を喜ばせるのと同じようであるのかどうかを理解してこそ、読んだことになるのだ。」

滕璘「理義（正しい道理）が心を喜ばせるというのは、やはり物事に対処してその事が理義に合致するのをみれば、自然に喜ばしくなるということでしょうか。」

朱子「もし終日、何事も無かったとしても、まさか理義は消えてなくなり、喜ぶこともないということがあろうか。例えば古の人の書物を読み、その中で物事が理義に合致していることを理解したり、古の人の行いと、自分がいま行なおうとしていることを考えて、それが少しでも理義に合致していると分かれば自ずと嬉しくなり、合致していないと分かれば自ずと恥じたり憤ったりする心が生じるはずだ。一々物事に直面するのを待つ必要はない。」

問所觀書。璘以讀告子篇對。曰「古人興於詩（１）、詩可以興（２）。又曰、雖無文王猶興（３）。人須要奮發興起必爲之心（４）、爲學方有端緒。古人以詩吟詠起發善心、今既不能曉古詩（５）、某以爲告子篇諸段、讀之可以興發人善心者、故勸人讀之。且如義理（校１）之悅我心、猶芻豢之悅我口（６）、讀此句、須知義理可以悅我心否、果如芻豢悅口否、方是得。」璘謂「理義悅心、亦是臨事見得此事合理義、自然悅懌（７）。」

曰「今則終日無事、不成便廢了理義、便無悅處。如讀古人書、見其事合理義。思量古人行事、與吾今所思慮欲爲之事、才見得合理義、則自悅。才見不合理義、自有羞愧憤悶之心。不須一一臨事時看。」

(校1) 朝鮮整版・正中書局本は「義理」を「理義」に作る。

(1) 興於詩 『論語』泰伯「興於詩、立於禮、成於樂」。『集注』「學者之初、所以興起其好善惡惡之心而不能自己者、必於此而得之」。

(2) 詩可以興 『論語』陽貨「小子、何莫學夫詩。詩可以興、可以觀、可以群、可以怨」。『集注』「感發志氣」。

(3) 雖無文王猶興 『孟子』尽心上「待文王而後興者、凡民也。若夫豪傑之士、雖無文王猶興」。

(4) 必爲之心 38条注(3) 参照。

(5) 今既不能曉古詩 分からないのは古の詩の真意か、或いは吟詠法か。『詩經』の読み方について、卷一一七・23条(二八一二頁)「觀詩之法、且虚心熟讀尋繹之、不要被舊說粘定、看得不活。伊川解詩亦說得義理多了。詩本只是恁地說話、一章言了、次章又從而歎詠之。雖別無義、而意味深長」と吟詠を説くが、卷八〇・23条(二〇七一頁)「問、詩雖是吟咏、使人自有興起、固不專在文辭。然亦須是篇篇句句理會着實、見得古人所以作此詩之意、方始於吟咏上有得。曰、固是。若不得其真實、吟咏箇甚麼。然古人已多不曉其意、如左傳所載歌詩、多與本意元不相關」の通り、吟詠する際にも内容理解が必要である。なお、『遺書』卷二一上・2条(二七七頁)「古人有聲音以養其耳、采色以養其目、舞蹈以養其

血脈、威儀以養其四體。今之人只有理義以養心、又不知求」との伊川語からは、吟詠法が失われていたことも察せられる。

(6) 義理之悦我心、猶芻豢之悦我口 『孟子』告子上「理義之悦我心、猶芻豢之悦我口」。

(7) 璘謂「自然悦懌 一一八・25条」(滕璘)曰、固是要見、亦當於事上見之。(朱子)曰、行事上固要見、無事時亦合理會。如看古人書、或靜坐、皆可以見」。

【一一八・40】

私(滕璘)にお訊ねになった。

朱子「昨日、臥雲菴で何をしていたのかね。」

滕璘「帰ると日も暮れており、読書はせずに静坐をしただけです。」

先生は横渠(張載)の六有を挙げて仰った。

朱子「言に法有り、動に教有り、昼に為す有り、宵に得る有り、息にも養ふ有り、瞬にも存する有り(言葉に節度があり、動作に規準がある。昼には為すところがあり、夜には得るところがある。一息の間にも心を養い、一瞬の間にも心を保持している)」。静坐であっても、安定して主となるものがなければいけない。そうでなければ、ただじっとしているだけのことになる。」

〔鄭可学の記録。先生が徳粹(滕璘)にお訊ねになった。〕

朱子「夜は庵で何に努めているのかね。」

徳粹がお答えすると、

朱子「横渠は「言に教有り、動に法有り、昼に為す有り、宵に得る有り、息にも養ふ有り、瞬にも存する有り」と言っているが、この言葉は非常によい。『易』に「君子は終日、乾乾たり（君子は終日、努力し続ける）」というように、食事の時でも休んでいる時でものんびり気を緩めてはいけない。とはいえ、必ずしも一日中読書をする必要はない。静坐をして心を存養するのもよい。天地が物を生じるのも、四季に応じて運動している。春に生じ、夏に生長する時には、もちろん休むことはない。しかし、秋冬になって生長が止まり凋落するに及んでも、（完全に途絶えてしまったのではなく）内側へ生命力をしまい込んでいるだけなのだ。だからこそ、次の年には再び生じるのだ。もし秋冬に至って絶えてしまっていたならば、翌春、再び生意が現れるよすがが無くなってしまわないか。学ぶ者も常に心と呼び覚まし、枯死させないようにするならば、日々前進があるだろう。」

問璣「昨日臥雲菴（校1）中何所爲。」璣曰「歸時日已暮、不曾觀書、靜坐而已。」先生舉横渠六有說「言有法、動有教、晝有爲、宵有得、息有養、瞬有存（1）、以爲雖靜坐、亦有所存主（2）始得。不然、兀兀而已。」〔可學錄云、先生問徳粹「夜間（校2）在菴（校3）中作何工夫。」徳粹云云。先生曰「横渠云、言有教、動有法、晝有爲、宵有得、息有養、瞬有存。此語（校4）極好。君子終日乾乾（3）、不可食息閑（校5）、亦不必終日讀書、或靜坐存養（校6）、亦（校7）是。天地之生物以四時運動。春生夏長、固是（校

8) 不息。及至秋冬凋落、只是(校9)藏於其中、故明年復生。若使至秋冬已絶、則來春無緣復有生意。學者常喚令此心不死、則日有進。」

(校1) 楠本本・朝鮮整版・正中書局本・和刻本は「菴」を「庵」に作る。

(校2) 楠本本は「夜間」を「掖間」に作る。

(校3) 楠本本・朝鮮整版・正中書局本・和刻本は「菴」を「庵」に作る。

(校4) 楠本本は「語」を欠き一字空白とする。

(校5) 朝鮮整版は「閑」を「閒」に作る。

(校6) 楠本本は「存養」を「在養」に作る。

(校7) 楠本本は「亦」の前を一字空白とする。

(校8) 楠本本は「是」を欠き一字空白とする。

(校9) 朝鮮整版・正中書局本は「是」を欠く。

(1) 横渠六有説く瞬有存 張載『正蒙』有徳「言有教、動有法、晝有爲、宵有得、息有養、瞬有存」、

『近思録』卷二にも採録。卷九八・71条(二五一九頁)に「息有養、瞬有存。言一息之間亦有養、一瞬之頃亦有存。如造次顛沛必於是之意、但說得太緊」とあり、『論語』里仁「君子無終食之間違仁、造次必於是、顛沛必於是」と通じるものとしている。本条後出の「食息」はこれを踏まえるか。

(2) 存主 心の主体性が保たれていること。卷十二・141条(二二七頁)「今求此心、正爲要立箇基址、

得此心光明、有箇存主處、然後爲學、便有歸着不錯」、卷一一七・10条（二八〇九頁）「應事接物之際、苟失存主、則心不在焉。」

(3) 君子終日乾乾 『易』乾「九三、君子終日乾乾、夕惕若、厲無咎」。

(37) 40条担当 阿部 光麿

【一一八・41】

德粹（藤璘）「四明（明州）で役人をしていた時、正しい道理に心がけておりましたが、利害の重なる場合には、憚るところもあつて、正しい道理をいったん捨て置いておりました。いかがでしょうか。」

朱子「他でもない、君の志が立っていないから、利害に引きずられてしまったのだ。」 「鄭可學」

德粹問「在四明（1）守官、要顧義理。纔到利害重處、則顧忌、只是拚（2）（校1）一去、如何。」先生曰「無他、只是志不立、却隨利害走了。」 「可學」

（校1）正中書局本は「拚」を「拚」に作り、楠本本・朝鮮整版・和刻本は「拚」に作る。「拚」は「拚」の俗字。

（1）四明 浙東・明州のこと。現在の寧波市。

(2) 拌 捨てる、捨て置く。卷二二八・26条(三〇六九頁)「致道云、若做不得、只得繼之以死而已。曰、固是事極也、不愛一死。但拌却一死、於自身道理雖僅得之、然恐無益於事」。

【一一八・42】

德粹(膝璘)に質問された。

朱子「心が動いた時には事物に應對するが、動いていない時にはどうなっているかね。」

膝璘「散漫なだけです。」

朱子「それが間違いだ。それでは自分の一箇の心を(動く時と動かない時との)二つにしてしまうことになる。よくよく(自分の心を)点検しなさい。」 [鄭可学]

問德粹「此心動時應物、不動時如何。」曰「只是散漫。」曰「便是錯了。自家一箇心却令成兩端。須是檢點他。」 [可學]

【一一八・43】

朱子「官に在る時は、もちろん官の仕事に取り組まなければならない。だが、官の仕事をよくこなしたと

しても、せいぜい人からいい役人だと言われるだけのことだ。学問をやつて大本を立てれば、それが（すべてのことにつながる）源流となる。人からいい役人だと言われようとするだけでは、今日ひとつ仕事をこなして、明日またひとつこなすというだけで、行き詰まってしまう。」

滕璘「初めて明州に赴任したとき、沈叔晦（煥）に師事しましたところ、「書物を読みたければ故郷の婺源の山中に座っていればよい。明州に赴任したからには政務に務めなさい」と言われました。」

朱子「県尉を務めること四年、滕德粹は何もしなかった。」〔鄭可学〕

「人在官、固當理會官事。然做得官好、只是使人道是一好官人。須講學立大本、則有源流。若只要人道是好官人、今日做得一件、明日又做一件、却窮了。」德粹云「初到明州（1）、問爲學於沈叔晦（2）。叔晦曰「若要讀書、且於婺源（3）山中坐。既在四明、且理會官事。」先生曰「縣尉既做了四年、滕德粹元不曾理會。」〔可學〕

（1）明州 41条注（1）参照。

（2）沈叔晦 沈煥、字叔晦。『資料索引』一卷六八一頁、『学案』卷七六、『宋史』卷四一〇。卷一二〇・114条（二九一四頁）「今江西諸人之學、只是要約、更不務博。本來雖有些好處、臨事盡是鑿空杜撰。」

……沈叔晦不讀書、不教人、只是所守所淺狹、只有些道理便守定了、亦不博之弊」。

（3）婺源 江西省北部。滕璘の故郷。

【一一八・44】

私（王力行）へのご教誨。

朱子「もし孔子や孟子の資質が生まれつきで、自分には及ぶべくもないと言う人がいれば、その人こそが（孟子のいう）「自暴自棄」であり、未来永劫、道を悟ることはない。（莊子の）所謂「九万里にして風すなはち下」にあり（九万里の高さにまで舞い上がってこそ、充分な風が翼の下にある）」というやつだ。」

「以下、王力行への訓戒。」

誨力行云「若有人云孔孟天資不可及、便知此人自暴自棄（1）、萬劫千生無緣見道。所謂九万里則風斯下（2）。」「以下訓力行。」

（1）自暴自棄 『孟子』離婁上「孟子曰、自暴者、不可與有言也。自棄者、不可與有爲也。言非禮義、謂之自暴也。吾身不能居仁由義、謂之自棄也。仁、人之安宅也。義、人之正路也。曠安宅而弗居、舍正路而不由、哀哉」。

（2）九万里則風斯下 『莊子』逍遙遊「風之積也不厚、則其負大翼也無力。故九万里、則風斯在下矣、

而後乃今培風」。

【一一八・45】

朱子「學問で切に忌むべきは、あることに取り組んで終らないうちに、放り出して別のことを求めるということだ。そんなことではいつまでたってもきりが無い。ひとつひとつけりを付けてゆき、ずっと続けてゆけば一貫性をもってくる。」

私（王力行）は退席後に先生の「格物」の説を読んだところ、李先生（李侗）が先生に教えた中にこういつた考えがあつたことに気づいた。

「講學切忌研究一事未得、又且放過別求一事。如此、則有甚了期（1）。須是逐件打結、久久通貫。」力行退讀先生格物之說、見李先生所以教先生有此意（2）。

（1）了期　終わり、きり、解決方法。卷十五・5条（二八三頁）「致知有甚了期」。

（2）讀先生格物之說、見李先生所以教先生有此意　『大学或問』「昔聞延平先生之教以爲、爲學之初、

且當常存此心、勿爲他事所勝。凡遇一事、即當且就此事反復推尋以究其理、待此一事融釋脫落、然後循序少進而別窮一事。如此既久、積累之多、胸中自當有洒然處。非文字言語之所及也」。卷十八・122条、

123条(四二二頁) 参照。卷一〇四・7条(二六二頁)「舊見李先生說、理會文字、須令一件融釋了後、方更理會一件。融釋二字下得極好。此亦伊川所謂今日格一件、明日又格一件、格得多後、自脫然貫通處」。

【一一八・46】

私(王力行)は連日お教えを受けていた。通判(州の副長官)の張殿が退席後私に言われた。

張士佺「私はここに來て五十日あまり、先生が多くの学ぶ者らに應對する様子をつぶさに見てきたが、いずれも手招きして誘うという程度だった。君に對してなさったような、氣力を尽くして厳しく鞭策を加えるさまは、他には見受けなかった。君が九割方出来あがつているからこそ、たたき鍛えて器を完成させようとなさっているのだ。先生のこのお心を知らないといけない。」

力行連日荷教。府判張丈(校1)(1)退謂力行曰「士佺到此餘五十日、備見先生接待學者多矣、不過誘之掖之。未見如待吾友著氣用力、痛下鉗鎚如此。以九分欲打煉成器、不得不(校2)知此意。」

(校1) 楠本本・和刻本は「丈」を「文」に作る。また、底本は陳本により「文」から「丈」に改めている。

(校2) 楠本本は「不得不」を「不得」に作る。

(1) 府判張丈 張士佺。字子真。府判は通判の別名で、州の副長官。朱子は張士佺の父(張維)の墓誌

銘を著しており、『文集』卷九三「左司張公墓誌銘」、そこに「子士侔、今爲朝奉郎通判融州事。……而士侔從予亡友張敬夫官學有聞、驗其操執器能、信其有似公者」とある。

(41) 46条担当 小池直)

【一一八・47】

周明作「物事にきわめて難しい問題がある時は、どうすればよいのでしょうか。」

朱子「いくつかの場合がある。外部から阻まれて解決できない場合もあれば、心の内が混乱して対応できない場合もある。また混乱の中こみ入った細かなところで対処が難しい場合もある。しかし、いずれの場合でもすべて自分が取り組んでゆく他ない。総じて、道理をはつきりと理解しさえすれば、それぞれの事柄ごとに自然と対応する一つの道理があるものだ。『易』に「蹟を探り隠を索む」とあるが、「蹟」とは奥深いことではなく、混乱を意味している。「隠」とは隠微で奥深いことだ。ただいずれも「探り」「索む」ことが重要なのだ。紛乱というのは物事自体が紛乱しているのであって、自分に定まった見識があれば、どうして物事が自分を紛乱させられようか。大体、当然避けられない事柄というものもある。それを避けていては何の修養にもならない。また世間の人間関係にまつわるような問題もあるが、そういった場合は避けられるならばとりあえず避ければよい。そうしないときりがない。何もかも引き受ける必要はないのだ。およそ省けることであれば、省いてしまつて構わないし、対処しようとしてもどうしようもないだけだ。そのままに

しておけないことは、むしろしっかり考えて処置しなければならない。そういった事柄の中に自ずと道理があるものだ。」

ある人「人の心は、混乱している時には保持し難いものです」

朱子「本当に保持するのは難しい。永く保持できなければ、また物事や雑念に引きずられて行ってしまう。『孟子』の「牛山之木」章では、「之を操れば則ち存し、之を舍つれば則ち亡ぶ（心は意識的にとらえていれば保たれるが、放置すればなくなる）」のところが一番理解しなければならない。」

ある人「心の保持が永続きできず、物欲に勝つことができません。」

朱子「これは他人事ではないのだから、たとえ難しくても自分で努めて保持して、常に心を目覚めさ、忽せにしてはならない。物欲の兆しを感じたら、すぐさま気を引き締め、欲に随わないようにするのだ。このことは自分自身の問題だ。心を保持できないとか、欲に勝てないとか言ってしまったては、自分で自分を駄目にしてしまう。何が「仁を為すは己に由る、人に由らんや（仁を行なうのは自分次第だ、どうして他人頼みにできようか）」だ。」

朱子「心をしつかり保持しておくことができなければ、喜怒憂懼の四者どれも心を動揺させてしまう。」そこで質問した。

周明作「『大学』の「憂患恐懼」の四字は、いずれも同じ意味なのではないでしょうか。」

朱子「同じではない。『恐懼』とは、目前に迫り来る緊迫したものが、人を恐懼させ身の置き所がないようにさせること。『憂患』とは、将来の大きな禍福や利害をあれこれ考え予め備えること。同じではない。」

周明作「『大学』の」「忿懣（怒り）」と「好樂」は自分の側の問題ですから、努力して抑えることができますが、「憂患」「恐懼」は外からやってくるものなので、自分の思いどおりにはならないのではないのでしょうか。」

朱子「いやそうではない。たとえ外からやってくるものでも、自分の中に一定の道理があつてそれで対処しなければならぬのだ。『恐懼』や『憂患』は、自分ではどうしようもなく感じるものだ。だから、考えるべき事がやつて来たら考えればよいのであるが、ひたすらそのことで本来の心を煩わせてしまつては、何にもならないということだ。孔子は匡の人に囲まれ、文王は羑里に囚われ、死の危機が目前に迫つていたが、彼ら聖人たちはそもそも動揺することなく、恬然と対処した。このことだけでも分かるように、道理をはつきりと理解していれば、自然とそうした患いはなくなるものだ。だから、聖人は「致知」「格物」を教へて、道理を考究させたのだ。『大学』八条目で「格物」「致知」より上位の段階である「誠意」「正心」もみな相互に関連して進んでいくのだ。」

「以下、周明作への訓戒。」

問「事有最難底奈何。」曰「亦有數等、或是外面阻遏做不得、或是裏面紛亂處不去、亦有一種紛拏時、及纖毫委曲微細處難處（校1）、全只在人自去理會。大概只是要見得道理分明、逐事上自有一箇道理。易曰、探蹟索隱（1）。蹟（校2）處不是奧、是（校3）紛亂時。隱是隱奧也、全在探索上。紛亂是他自紛亂、我若有一定之見、安能紛亂得我。大凡一等事固不可避、避事不是工夫。又有一等人情底事、得遣退時且遣退、無時是了（2）、不要摟攬。凡可以省得底事、省亦不妨、應接亦只是不奈何。有合當住不得底事、此却要思

量處置、裏面都自有箇理。」或謂「人心紛擾時難把（校4）捉。」曰「真箇是難把持。不能得久、又被事物及閑思慮引將去。孟子牛山之木一章、最要看操之則存、舍之則亡（3）。」或又謂「把持不能久、勝物欲不去。」曰「這箇不干別人事。雖是難、亦是自著力把持、常惺惺（4）、不要放倒。覺得物欲來、便著緊不要隨他去。這箇須是自家理會。若說把持不得、勝他不去、是自壞了、更說甚爲仁由己、而由人乎哉（5）。」又曰「把心不定、喜怒憂懼四者皆足以動心。」因問「憂患恐懼（6）、恐四字似一般。」曰「不同。恐懼是目下逼來得緊底、使人恐懼失措。憂患是思慮、預防那將來有大禍福利害底事。此不同。」又問「忿懣好樂（7）、乃在我之事、可以勉強不做。如憂患恐懼、乃是外面來底、不由自家。」曰「都不得。便是外面來底、須是自家有箇道理措（校5）置得下。恐懼憂患、只是徒然。事來亦合當思慮不妨、但只管累其本心、也不濟得事。孔子畏匡人（8）、文王囚羑里、死生在前に、聖人元不動心、處之恬然。只看此、便是要見得道理分明、自然無此患。所以聖人教人致知、格物、考究一箇道理。自以上、誠意、正心皆相連上去也。」（以下訓明作。）

（校1）楠本本は、「難處」を「難」に作る。

（校2）楠本本は、「蹟」字を欠く。

（校3）楠本本は、「是」字を欠く。

（校4）楠本本は「把」を「杞」に作る。

（校5）楠本本は、「措」を「處」に作る。

（1）探蹟索隱 『周易』繫辭上伝「探蹟索隱。鉤深致遠。以定天下之吉凶」。

(2) 無時是了　きりが無い、これで終わりという時はない。卷十三・86条(二三六頁)「世事無時是了。

且揀大段無甚緊要底事、不要做。又逐旋就小者又揀出無緊要底、不要做。先去其粗、却去其精、磨去一重、又磨一重。天下事都是如此」。

(3) 孟子牛山之木一章「舍之則亡　『孟子』告子上「孔子曰操則存、舍則亡。出入無時、莫知其鄉。惟心之謂與」。

(4) 常惺惺　謝良佐『上蔡語錄』卷中・36条「敬是常惺惺法」。

(5) 爲仁由己、而由人乎哉　『論語』顏淵「克己復禮爲仁。一日克己復禮、天下歸仁焉。爲仁由己、而由人乎哉」。

(6) 憂患恐懼　『大学』「所謂脩身在正其心者、身有所忿懣、則不得其正。有所恐懼、則不得其正。有所好樂、則不得其正。有所憂患、則不得其正」。

(7) 忿懣好樂　本条注(6)参照。

(8) 孔子畏匡人　『論語』子罕「子畏於匡。曰文王既沒、文不在茲乎。天之將喪斯文也、後死者不得與於斯文也。天之未喪斯文也、匡人其如予何」。

(47条担当　宮下和大)

およそ日常の修養においては、自ら氣を引き締めて心を把握しなければならぬ。正しくないと分かったならば、それを行うことなく、正しくないことに引きずられてはならない。発言に従うべき善いものがあるのに、そこに不善が混じることがあり、結局相変わらず不善に引きずられてしまったり、考えていることがふいに別の考えによって引きずられてしまったりするの、すべて自分がしっかりと把握していないからであり、それは他人事ではなく自分自身の問題なのだ。自ら把握して、何者にも引きずられないようにならなければいけない。顔子が仁を問ひ、孔子は多くの言葉で答えているが、その最後に「仁を為すは己に由る、而して人に由らんや（仁を行なうのは自分次第だ、どうして他人頼みにできようか）」と言っている。考えてみれば、この最後の二句は（仁の解釈としては）なくてもよい。しかし、その他の多くの言葉も、自分で積極的に努力しなければ、どうして理解できようか。不善であることを知りつつもやってしまうとしたら、思うにそれは身にしみて分かっていないということだ。もし真に知っていれば、絶対にやろうとはしないはずだ。たとえば、飲食が過ぎれば身体を損なうというが、そんなことは誰でも知っている。しかし、それだけでは真に知っているのではない。ある日、過度な飲食をして実際に身体を悪くしてしまったならば、翌日は決して過剰に飲食はしないはずだ。これこそその害を真に知ったということであり、こうして二度とこのようなことはしないようになるのだ。

把握するというのは、もちろん自分で努めることだが、単調で味わいに欠けるため、急には取り組みやすいものではない。日頃からたくさん読書をして道理を明らかにし、それによってじっくりと養い育て上げて、この心がいっつも道理とかみ合うようにしなければならぬ。これを久しく続けければ自然に熟していき、そ

こでようやく得るものを実感できるだろう。たとえば読書をして、今日は一、二段を読み、翌日は三、五段を読むというだけでは、まだどうということはない。歳月を費やして読み、読んだものが多くなれば、自然に効果が現れるものなのだ。要するに、『論語』『孟子』はもちろん読まなければならないが、六経も読まなければならないし、史書も読まないわけにはいかない。探究することが多くなれば、自然に熟するのだ。

ただ最初の段階においては太い力を込めて探究し、道理を徹底的に理解しなければならない。最初の一つ目二つ目がやや難解であるだけで、その後は道理によって推し量っていけば、何の困難もなく、『易』に所謂「類に触れて長ず（種類に應じて成長してゆく）」という具合に次々理解できるようになる。たとえば、初めて出仕して行政文書を見た時など、最初は何が何やら分からず、どう扱っていいのかわかりにくいので、意識的に努力して、決まりに則って考えていかなければならない。そうやって三つ五つの条項に取り組んでいけば、自然と熟してきて、その後は、最初のように難しくはなくなり、やはり類推していくことができるようになる。あるいはまた、物の重さを知ろうとするなら、秤を用いなければならぬが、始終手で握ね繰り返して慣れている人ならば、手の上に置いただけで、その物がどれくらいの重さかが分かり、秤を用いるまでもない。これは他でもない、熟しているということだ。今日も握ねくりまわし、明日も握ねくりまわして、そうして長く続けていればおのずと熟す。あるいは数多の職人達の精巧な技術も同じで、やはり習熟してこそ精密なのだ。

孟子は「夫れ仁も亦た之を熟するに在るのみ（五穀も熟してこそ美味しいように、仁もまた養い育てて成熟させなければならない）」と言っている。熟することを尊ぶ理由は、この心が義理（正しい道理）とびつ

たりと一つになることを求めるからに他ならない。もし義理と自分自身とが近しくなれば、道理に背くようなことは、自然と遠のくものだ。思慮があらぬ方向へ行ってしまうことが多いのも、熟していないからに過ぎず、熟せば自然にそのようなことはなくなる。またたとえば、何かをしたまま道理に合致すれば心は安らぐが、違えば心は落ち着かないというが、これこそ本然の理（人の心が本来持っている正しい道理）の現われであり、だからこそ違えば落ち着かなく感じるのだ。とはいえ、正しくないことをしても、それに気づかないこともある。常に心を覚醒させて省察し、いい加減にやり過ぎしてはいけない。私の見たところ、学問の道とはただ目の前にある日常に他ならないのであって、奥深く玄妙なものなど何もない。

凡（校1）日用工夫、須是自做喫緊把握。見得不是處、便不要做、勿徇他去。所說事有善者可從、又有不善者間之、依舊從不善處去。所思量事忽爲別思量勾引將去、皆是自家不曾把握得住、不干別人事。須是自把握、不被他引去方是。顏子問仁、孔子答許多話、其末却云、爲仁由己、而由人乎哉（1）。看來不消此二句亦得。然許多話、不是自己著力做、又如何得。明知不善又去做、看來只是知得不親切。若真箇知得、定不肯做。正如人說飲食過度傷生、此固衆所共知、然不是真知。偶一日飲食過度爲害、則明日決不分外飲食。此真知其傷、遂不復再爲也。

把握之說、固是自用著力、然又以枯槁無滋味、卒急不易著力。須平日多讀書、講明道理、以涵養灌培、使此心常與理相入、久後自熟、方見得力處。且如讀書、便今日看得一二段、來日看三五段、殊未有緊要。須（校2）是磨以歲月、讀得多、自然有用處。且約而言之、論孟固當讀、六經亦當讀、史書又不可不讀。講究得多、

便自然熟。但始初須大段著力窮究、理會教道理通徹。不過一二番稍難、向後也只是以此理推去、更不艱辛、可以觸類而長（2）。正如入仕之初看公案、初看時自是未相諳、較難理會。須著（校3）些心力、如法考究。若如此看得三五項了、自然便熟。向後看時、更不似初間難、亦可類推也。又如人要知得輕重、須用稱（校4）方得。有拈弄得熟底、只把在手上、便知是若干斤兩、更不用稱（校4）。此無他、只是熟。今日也拈弄、明日也拈弄、久久自熟。也如百工技藝做得精者、亦是熟後便精。

孟子曰、夫仁亦在乎熟之而已（3）。所以貴乎熟者、只是要得此心與義理相親。苟義理與自家相近、則非理之事、自然相遠。思慮多走作、亦只是不熟、熟後自無。又如說做事偶合於理則心安、或差時則餒、此固是可見得本然之理、所以差時便覺不安。然又有做得不是處（校5）、不知覺悟。須是常惺惺省察、不要放過。據某看、學問之道、只是眼前日用底便是、初無深遠玄妙。

（校1）和刻本是「凡」を「此」に作る。

（校2）正中書局本は「須」を「堆」に作る。朝鮮整版は「須」を「惟」に作る。

（校3）楠本本は「著」の字を欠き、空格とする。

（校4）楠本本・正中書局本・朝鮮整版・和刻本は「稱」を「秤」に作る。

（校5）正中書局本・朝鮮整版は「處」を「時」に作る。

（1）爲仁由己、而由人乎哉 『論語』顏淵。

（2）觸類而長 『周易』繫辭上「是故、四營而成易、十有八變而成卦。八卦而小成、引而伸之、觸類而

長、天下之能事畢矣。

(3) 夫仁、亦在乎熟之而已 『孟子』告子上「五穀者、種之美者也。苟爲不熟、不如萑稗。夫仁亦在乎熟之而已矣」。

(48条担当 松野 敏之)

【一一八・49】

朱子「おおよそ学問というものは、一端を理解するだけではだめだ。聖賢の千言万語は、一見錯綜しているようにも、すべて一つの道理に貫かれている。先ずは緊要のところにしぼって取り組むのはもちろんよいが、他のことも一つ一つ取り組んでゆき、それらが集って一つの道理になるようにでなければならぬ。天下の物事は、一つ事だけに固執してしまうと、結局成し遂げられないものだ。莊子の「風の積もること厚からざれば、則ち其の大翼を負ふも力無し（風の量が十分でなければ、大きな翼を支えようにも力が足りない）」というようなものだ。たくさんの事柄を理解してこそ、それが基礎となって支えられるようになる。たとえば『論語』の曾子の言葉に「籩豆（へんとう）の事は則ち有司存す（祭祀のお供えの器のことについては、係の役人がある）」とあるが、籩豆の事（のような些末な事）は度外視して、理解する必要などないと言っているのではない。「容貌を動かす」以下のこの条では、（動容貌・正顔色・出辞氣の）三句が自分にとって緊要のやるべきことであり、籩豆の事は係の役人に任せた、比較的軽いことなのだ。もし上の三句だけに取り組み、

籩豆のことについてまったく関知していなければ、万が一、役人に籩（竹製の祭器）のことを豆（木製の祭器）だと言われても、まったく分かっていなければ、騙されてしまうだろう。また、田子方は「君は樂官に明るく、樂音に明るからず（君主は音樂を司る官職に明るければよいのであり、音樂自体に明るい必要はない）」と言ったが、彼の説は正しくない。樂音に明るくなければ、どうやって樂官に明るくなれるのだろうか。それではそのうち、「宮」の音のことを「商」の音だと騙されてしまうことにもなるう。だから『中庸』では真つ先に「博く之を学ぶ」といい、孟子は「博く学びて、之を詳説す」と言っているのだ。考えてもみなさい、孔子は生まれながら知る聖人と称されるが、事あるごとに outcomes に出かけていつて人に質問し、礼や喪礼を老聃に質問したりと、このような類の話は非常に多い。官名のようなものは理解していなくても何ら支障はなからうに、聖人である孔子は汲々と郷子に質問をしに行つたのだ。つまり、自分が知らないことは、人に質問しに行かなければならないということだ。」

関連して仰った。

朱子「南軒（張栻）の『洙泗言仁』は、編集（の方針）が良くない。聖人が仁を直接語つた箇所は当然仁（に関する言説）だが、仁と言っていない箇所が仁と無関係なわけではない。天下はただ一つの道理に貫かれており、聖人は様々に語っているのだから、それらすべてを理解しなくてはならないのだ。どうして仁と言っている箇所だけに組み組んで、仁を言っていない箇所は捨てて顧みないということが許されようか。子思は『中庸』を作ったが、非常に緻密で労作だ。彼の思考がそのようであつたのだ。『徳性』以下の五句は、このように多くの言葉を並べなければ言い尽くせないことであるが、それでも第一句（徳性を尊びて問學に

道る」が主となる。「广大を致す」「高明を極む」「故きを温ぬ」「敦厚」といった（各句の）前半部分は、「徳性を尊ぶ」についてのこと、「中庸に道る」「精微を尽くす」「新しきを知る」「礼を崇ぶ」といった後半部分は、「問学に道る」についてのことだ。何事も微細なことまでくまなく理解し、どんなに細かいことでも漏らさないようにしなければならない。どうして一つのことだけ理解すればよいということがあろうか。」

ある人が「新しきを知る」の意味を尋ねた。

朱子「新」とは「故」の中のこと、「故」とは昔のことだ。これを繰り返して復習することで「徳性を尊ぶ」のだ。その後で、その内容に関して新しい考えを求める、これが「問学に道る」ということだ。」

「大凡學問不可只理會一端。聖賢千言萬語、看得雖似紛擾、然却都是這一箇道理。而今只就緊要處做固好、然別箇也須一一理會、湊得這一箇道理都一般、方得。天下事硬就一箇做、終是做不成。如莊子說風之積也不厚、則其負大翼也無力（1）。須是理會得多、方始襯簾（2）得起。且如籩豆之事則（校1）有司存（3）、非是說籩豆之事置之度外、不用理會。動容貌三句、亦只是三句是自家緊要合做底、籩豆是付與有司做底、其事爲輕。而今只理會三句、籩豆之事都不理會、萬一被有司喚籩豆、若不會曉得、便被他瞞。又如田子方說君明樂官、不明樂音（4）、他說得不是。若不明得音、如何明得官。次第被他易官爲商（5）、也得。所以中庸先說箇博學之（6）、孟子曰博學而詳說之（7）。且看孔子雖曰生知（8）、事（校2）事去問人（9）、若問禮問喪於老聃（10）之類甚多。只如官名不曉得、莫也無害、聖人亦汲汲去問郯子（11）。蓋是我不知底、須是去問人、始得。」

因說「南軒洙泗言仁（12）、編得亦未是。聖人說仁處固是仁、然不說處不成非仁。天下只有箇道理、聖人說許多說話、都要理會。豈可只去理會說仁處、不說仁處便掉了不管。子思做中庸、大段周密不易、他思量如是。德性五句（13）、須是許多句方該得盡、然第一句爲主。致廣大、極高明、溫故、敦厚、此上一截是尊德性事。如道中庸、盡精微、知新、崇禮、此下一截是道問學事。都要得纖悉具備、無細不盡、如何只理會一件。」或問知新之理。曰「新是故中之事、故是舊時底、溫起來以「尊德性」。然後就裏面討得新意、乃爲「道問學」。」

（校1）正中書局本・朝鮮整版・和刻本は「則」を「各」に作る。

（校2）正中書局本・朝鮮整版・楠本本・和刻本は「事」を「是」に作る。

（1）莊子説く其負大翼也無力 『莊子』逍遙遊「風之積也不厚、則其負大翼也無力」。

（2）襯簾 「襯」は肌着、「簾」はむしろ。「襯簾」は、學問を進める際の「支え」「基礎」といった意味か。卷二二・9条（二九二〇頁）「須盡記得諸家説、方有箇襯簾處、這義理根脚方牢、這心也有殺泊處」、卷一三七・17条（三二五五頁）「只是空見得箇本原如此、下面工夫都空疏、更無物事撐住襯簾、所以於用處不甚可人意」。

（3）籩豆之事則有司存 『論語』泰伯「君子所貴乎道者三。動容貌、斯遠暴慢矣。正顔色、斯近信矣。出辭氣、斯遠鄙倍矣。籩豆之事、則有司存」。朱熹は、他の箇所においても本条と同じく、籩豆や樂音、または官名といった些末な事柄についても明るくなければならぬと説いている。卷十五・95条（三〇

○頁）「常說田子方說文侯聽樂處、亦有病。不成只去明官、不去明音、亦須略去理會始得。不能明音、又安能明官。或以宮爲商、以角爲徵、自家緣何知得。且如籩豆之事、則有司存、非謂都不用理會籩豆、但比似容貌、顏色、辭氣爲差緩耳。又如官名、在孔子有緊要處。聖人一聽得郟子會、便要去學。蓋聖人之學、本末精粗、無一不備、但不可輕本而重末也」、卷三五・47条（九一八頁）「這但是說此三事爲最重耳。若是其他、也不是不管。只是說人於身上事都不照管、卻只去理會那籩豆等小事、便不得。言這箇有有司在、但責之有司便得。若全不理會、將見以籩爲豆、以豆爲籩、都無理會了。田子方謂魏文侯曰、君明樂官、不明樂音。此說固好。但某思之、人君若不曉得那樂、卻如何知得那人可任不可任。這也須曉得、方解去任那人、方不被他謾。如籩豆之類、若不曉、如何解任那有司。若籩裏盛有汁底物事、豆裏盛乾底物事、自是不得、也須著曉始得、但所重者是上面三事耳」。

（4）田子方說君明樂官、不明樂音 『戰國策』卷二二「魏文侯與田子方飲酒而稱樂。文侯曰、鍾聲不比平、左高。田子方笑。文侯曰、奚笑。子方曰、臣聞之、君明則樂官、不明則樂音。今君審於聲、臣恐君之聾於官也。文侯曰、善、敬聞命」。『資治通鑑』卷一にも見える。注（3）に引いた卷十五・95条および卷三五・47条参照。

（5）易宮爲商 宮と商はいずれも五音（宮商角徵羽）の一つ。

（6）中庸先說箇博學之 『中庸』（章句經二〇章）「博學之、審問之、慎思之、明辨之、篤行之」。

（7）孟子曰博學而詳說之 『孟子』離婁下「孟子曰、博學而詳說之、將以反說約也」。

（8）孔子雖曰生知 孔子自身は自らを「生知（生まれながらにして知る）」とはしていない。述而「我

非生而知之者、好古敏以求之者也。「生知」は最も上の資質を指す。『論語』季氏「孔子曰、生而知之者、上也」、『中庸』（章句經二〇章）「或生而知之、或學而知之、或困而知之。及其知之一也」。

(9) 事事去問人 『論語』八佾「子入大廟、每事問」。『論語』鄉党。

(10) 問禮問喪於老聃 『礼記』曾子問「孔子曰、昔者吾從老聃、助葬於巷黨」、「孔子曰、吾聞諸老聃」、「史記」卷六三「孔子適周、將問禮於老子」。

(11) 問鄭子 孔子は官名について学ぶため、鄭子を訪ねたという。『春秋左氏伝』昭公十七年「仲尼聞之、見於鄭子而學之」。

(12) 洙泗言仁 張栻が仁についての聖賢たちの言説を集めた資料集。序のみが現存する。『南軒集』卷十四「洙泗言仁序」に「某讀程子之書、其間教門人取聖賢言仁處、類聚以觀而體認之、因哀魯論所載、疏程子之說于下、而推以己見、題曰洙泗言仁。與同志者共講焉」とあり、張栻は本書を友人との講学に用いていたようである。なお、この書の編集方針に対する朱熹の批判は、以下の箇所にも見える。卷一〇三・40条（二六〇五頁）「王壬問、南軒類聚言仁處、先生何故不欲其如此。曰、便是工夫不可恁地。如此、則氣象促迫、不好。聖人說仁處固是緊要、不成不說仁處無用」、『文集』卷三一・答張敬夫六「類聚孔孟言仁處、以求夫仁之說、程子爲人之意、可謂深切。然專一如此用功、却恐不免長欲速好徑之心、滋入耳出口之弊、亦不可不察也」。

(13) 德性五句 『中庸』（章句經二七章）「故君子尊德性而道問學、致廣大而盡精微、極高明而道中庸。溫故而知新、敦厚以崇禮」の計五句。

ある日、『大学』を読むことについて議論している際、いつも雑念によつて心が乱されてしまい、非常に修養が妨げられているとお答えした。

朱子「それは敬でないからに他ならない。敬というのは心を常に覚醒させる方法であり、敬を根本に置けば、あらゆる事はそれに基づいてやつていくことができるのだ。最近の人は自分自身のことをまったくおざりにして、心の在処も知らないくせに、他人の事を知りたがり、果ては「家を斉へ、国を治め、天下を平らかにす」ることを求めている。心は、自分自身の主体たるもの、船を進めるには竿さおを使う必要があるし、ものを食べるには匙さじを使う必要があるようなものだ。心を知らないのは、竿や匙を使わないようなものだ。心を掴まえるには敬きやうしかない。敬でさえあれば、何をするにも、山を登るのもこの心、水に入るのもこの心だ。」

「蔡愚に対する訓戒。」

一日因論讀大學、答以每爲念慮攪擾、頗妨工夫。曰「只是不敬。敬是常惺惺底法（1）、以敬爲主、則百事皆從此做去。今人都不理會我底、自不知心所在、都要理會他事、又要齊家、治國、平天下（2）。心者、身之主也。撐（校1）船須用篙、吃（校2）飯須用（校3）匙。不理會心、是不用篙、不使匙之謂也。攝心只是敬。才敬、看做甚麼事、登山亦只這箇心、入水亦只這箇心。」

「訓愚。」

(校1) 正中書局本・朝鮮整版・和刻本は「撐」を「撐」に作る。

(校2) 正中書局本・朝鮮整版・和刻本は「吃」を「喫」に作る。

(校3) 正中書局本・朝鮮整版は「用」を「使」に作る。

(1) 敬是常惺惺底法 謝良佐の「敬是常惺惺法」(『上蔡語録』卷中)に基づく。朱熹は敬を定義する際、しばしばこの語を用いる。

(2) 齊家、治國、平天下 『大学』(章句經一章)「古之欲明明德於天下者、先治其國。欲治其國者、先齊其家。欲齊其家者、先脩其身。欲脩其身者、先正其心。欲正其心者、先誠其意。欲誠其意者、先致其知。致知在格物」。

(49) 50条担当 江波戸 互

【一一八・51】

楊与立が同じく質問した。

楊与立「常々、気が小さく臆病で、びくびくしすぎて、いつも心に何か気がかりなことがあり、すっきり愉快な気持ちになれないことを悩んでおります。こういった欠点はどうしたものでしょうか。」

朱子「試しに考えてみなさい、自分自身、本当に気にしなければならないことがあるのか、ないのか。」

楊与立「本当は何もないのですが、何かあるように思ってしまうのです。」

朱子「何もないのならば、何もないのだ。いったい何を恐れているのかね。道理を徹底して理解しないから、そんなふうにびくびく恐れるのだ。もし道理を徹底的に理解すれば、自然に心の中に気がかりなことはなくなる。しかし、君のいうようなものも心の病だな。」

そこで『程氏遺書』の「虎を捉える」話と「部屋中に尖ったものを置いた」話を挙げられた。

朱子「たとえば、いま潔癖症を患っているという人がいるが、潔癖症という病などいったいどこにあるのか。疑い病にすぎない。（清潔かどうか）疑うからそんなふうになって（病的に気になって）しまうのだ。君主や父の前（といった緊張する場面）でも、同じように気に病んでいられるかね。」

そこで、劉黻が、氣質には人それぞれの欠点があつて、同じではないと論じた。

朱子「道理が明らかになりさえすれば、氣質は自ずと変化して、欠点はすべて姿を消してしまう。」

〔以下、楊与立と劉黻に対する訓誡。〕

與立同問、常苦（校1）志氣怯弱、恐懼太過、心下常若有事、少悅豫底意思、不知此病痛是如何。曰「試思自家是有事、是無事。」曰「本無事、自覺得如此。」曰「若是無事、便是無事、又恐懼箇甚。只是見理不徹後如此。若見得理徹、自然心下無事。然此亦是心病。」因舉遺書捉虎（校2）（1）及滿室置尖物事（2）。又曰「且如今人害潔淨（校3）病（3）、那裏有潔淨（校3）病。只是疑病、疑後便如此。不知在君父之前、還如此得否。」黻又因論氣質各有病痛不同。曰「纔明理後、氣質自然變化、病痛都自不見了。」〔以下

訓與立黻。」

(校1) 正中書局本・朝鮮整版は、「苦」を「若」に作る。

(校2) 底本は、校勘を附して「處」を「虎」に改める。楠本本・正中書局本・朝鮮整版・和刻本は、いずれも「虎」に作る。

(校3) 楠本本・正中書局本・朝鮮整版・和刻本は、「潔淨」を「淨潔」に作る。

(1) 遺書捉虎 『遺書』卷十八・113条(二二〇頁)「曰、且譬如二人捕虎、一人力盡、一人須当同去用力。如執干戈衛社稷、到急處、便遁逃去之、言我有親、是大不義也。當此時、豈問有親無親」。

(2) 滿室置尖物事 『遺書』卷二下・9条(五一頁)「目畏尖物。此事不得放過。便與克下。室中率置尖物、須以理勝他。尖必不刺人也。何畏之有」。『近思錄』卷五にも採録する。

(3) 潔淨病 潔癖症のこと。『考文解義』に「謂人好潔淨之病害、謂爲此病所害、古人多有此病、如梁何佟之、一日洗滌十餘過、人稱水淫。宋庾仲文、客至未出戶、令人拭席洗床之類」とある。ここでは庾仲文のように、人前で過度の清潔を求めて、非礼な行動を起こしてしまうものを想定しているのである。卷一二四・43条(二九七八頁)「先生嘗說、陸子靜楊敬仲自是十分好人、只似患淨潔病底」。

先生が楊与立らを論して言われた。

朱子「学問の道は他でもない、ただただ目の前の多くの道理を理解しようとする事だ。世の中の物事には、その大小を問わず、いずれも道理がある。例えば『中庸』にいう「性に率ふを之れ道と謂ふ」も、この道理であるし、「道は須臾も離るべからず」も、この道理だ。自分がなすべきことだと分かればそれをなし、すべきでないことは断じてしない、それだけの事だ。」

朱子「学問は、あれこれ特別なことではない。心身を養い保ち、道理を追究して、「好色を好むが如く、悪臭を惡むが如く」、是非善惡を分別することに尽きる。それができれば、学問は着実なものとなり、自然に進んでいく。」

朱子「經書で論じられているのは、ただ一つの道理にすぎない。何度も繰り返し様々に語られているので、色々な面が顔を出しているだけだ。例えば『論語』や『孟子』にも、たくさん話が載せられている。一人の聖賢が現われて一たび語り、もう一人の聖賢が現われて、また初めからもう一度語るといふ具合だ。『尚書』で堯が語ったのもこの道理、舜が語ったのもこの道理、禹・湯王・文王・武王に至るまでも、同じ道理を語ったにすぎない。さらにいえば、『詩經』の中で周公が褒め称えた文王・武王の盛んなる徳も、この道理だ。また桀や紂が危機におちいり滅亡したのは、この道理に反したからに他ならない。もし何か別の道理を選び出せるのなら、古人が選び出しているはず、選び出せないからこそ、この道理を共有しているのだ。」

朱子「読書は、一つ一つ読んでいかなければいけない。一つのことを理解できてはじめて、別のことに移るのだ。あることの理解が徹底して適切になれば、一生それについてはそれ以上考える必要はなく、後は折

に触れて復習し、じっくり養つてゆけばよい。もし一つ一つ理解していかなければ、老年に至るまで読書をして、相変わらず（読んだものが）身につかない。それでは何も読まなかったも同然で、何にもならない。たとえば食事をするにも、まさか一日で（一生分を）残らず食べ尽くそうというわけにはいくまい。（一日を）三度に分けて、一回一回食べてゆくのだが、そうやって一生どれだけ多くの食事をすることか。読書もまた同じことだ。」

劉勰「学ぶ者にとつて、まず志を立てるということは、難しいことと存じます。」

朱子「それも何も特別なあれこれがあるのではない。敬ということに尽きる。徹頭徹尾、この道理に他ならない。（敬を保つことが）しっかりと強くなれば、自ずと多くの私利私欲を克服することができる。」

「温公（司馬光）「人は（心をおさめることを）暴れ馬を制し、盤石を持ち上げるように困難だと思つてゐる。しかし冷静に考えてみれば、自分の問題にすぎない。（自分がその気にさえなれば）とぼそを回転させるようなもの、何の困難があろうか。」」

先生誨與立等曰「爲學之道無他、只是要理會得目前許多道理。世間事無大無小、皆有道理。如中庸所謂率性之謂道（1）、也只是這箇道理、道不可須臾離（1）、也只是這箇道理。見得是自家合當做底便做將來、不當做底斷不可做、只是如此。」又曰「爲學無許多事（2）、只是要持守心身（校1）、研究道理、分別得是非善惡、直是如好好色、如惡惡臭（3）。到這裏方是踏著實地、自住不得。」又曰「經書中所言只是這一箇道理、都重三疊四說在裏、只是許多頭面出來。如語孟所載也只是這許多話。一箇聖賢出來說一番了、一箇聖

賢又出來從頭說一番。如書中堯之所說、也只是這箇。舜之所說、也只是這（校2）箇。以至於禹湯文武所說、也只是這箇。又如詩中周公所贊頌文武之盛德、亦只是這箇。便若桀紂之所以危亡、亦只是反了這箇道理。若使別撰得出來、古人須自撰了。惟其撰不得、所以只共這箇道理。」又曰「讀書須是件件讀、理會了一件、方可換一件。這一件理會得通徹是當（4）了、則終身更不用再理會、後來只須把出來溫尋涵泳便了。若不與逐件理會、則雖讀到老、依舊是生底、又却如不曾讀一般、濟甚事。如喫飯、不成一日都要喫得盡。須與分做三（校3）頓喫、只恁地頓頓喫去、知一生喫了多少飯。讀書亦如此。」黻因說「學者先立心志爲難。」曰「也無許多事、只是一箇敬。徹上徹下、只是這箇道理。到得剛健、便自然勝得許多物欲之私。」〔溫公謂、人以爲如制悍馬、如幹（校4）盤石之難也。靜而思之、在我而已。如轉戶樞、何難之有（5）。〕

（校1）正中書局本・朝鮮整版・和刻本は、「心身」を「身心」に作る。

（校2）楠本本は、「這」を「道」に作る。

（校3）朝鮮整版は、「三」を「二」に作る。

（校4）底本は、「幹」に作る。正中書局本・朝鮮整版・和刻本に拠つて改めた。

（1）中庸所謂率性之謂道／道不可須臾離 『中庸』（章句三一章）「天命之謂性、率性之謂道、修道之謂教。道也者、不可須臾離也、可離非道也。是故君子戒慎乎其所不睹、恐懼乎其所不聞。莫見乎隱、莫顯乎微。故君子慎其獨也」。

（2）無許多事 あれこれ多くの項目はない、あれこれ煩瑣なことはない、どうということはない。卷一

一五・26条（二七七頁）「仲思言、正大之體難存。曰、無許多事。古人已自說了、言語多則愈支離」。

（3）如好好色、如惡惡臭 『大学』（章句伝六章）

（4）是當 適切、びつたりと正しく当てはまる。卷二六・98条（六六四頁）「凡事皆有一箇合宜底道理、

須は見得分明、雖毫髮不差、然後得是當」。

（5）温公謂く何難之有 司馬光『温国文正公文集』卷七四・回心「何謂回心。曰、去惡而從善。舍非而

從是。人或知之而不能從、以爲如制悍馬、如斡盤石之難也。靜而思之、在我而已。如轉戸樞、何難之有」。

（51）52条担当 中嶋諒

【二一八・53】

劉黻「思よこしまひ邪無し」ということは、もちろんそうでなければなりません、どうしてもそのようになるのですよ

うか。」

朱子「邪なことを自分で思わないようにすればいいだけのことだ。」

劉黻「たとえば敬を保とうとすれば、どうしても敬に純一でありたいと思わないことがありましようか。しかし、自然に敬でない念慮が現われて、どうしても自分の意思に逆らつて、制御しようとするほどひどくなります。あるいは敬を保ちさえすればよいのであつて、雑念が生まれても放っておけばそのうち落ち着くという者もおります。そんなことができるのでしょうか。」

朱子「要するに、邪と正は、本来並び立たないということだ。ただ、自分の胸中に主とするものがないことが問題なのだ。もし主とするものがあれば、邪は自ずと入り込んでくることはできない。」

劉黻「敬ではない念慮は、本来の心から出て来るわけではありません。しかし、怒りや欲望の萌もぎしなどは、学ぶ者はしっかりと自身で克服すべきとはいえず、聖人や賢人でさえもそれを無くすることはできません。ただ、思慮が妄りに生じてしまうことについては、制御しようとしてもどうすることもできません。」

朱子「少しでもそう感じたならば、その都度自分自身で意識を高めるしかない。ただ、あらかじめ怒りや欲望が湧き起こることを防ごぐうとしてはいけない。もっとも、それは自分が道理を十分に理解できず、主となるものが定まっていないから、そのようになってしまふのだ。『大学』に「物格りてしかる後知至り、知至りてしかる後意誠なり」とあるが、意が誠になれば、自然にそういった問題はなくなるのだ。」

黻問「思無邪（１）、固要得如此、不知如何能得如此。」曰「但邪者自莫思、便了。」又問（２）「且如持敬、豈不欲純一於敬。然自有不敬之念固欲與己相反、愈制則愈甚。或謂只自持敬、雖念慮妄發、莫管他、久將自定、還如此得否。」曰「要之、邪正本不對立、但恐自家胸中無箇主。若有主、邪（校１）自不能入（３）。」又問「不敬之念非出於本心。如忿慾之萌、學者固當自克、雖聖賢亦無如之何。至於思慮妄發、欲制之而不能。」曰「才覺恁地、自家便掣起了、但莫先去防他。然此只是自家見理不透、做主不定、所以如此。大學曰、物格而後知至、知至（校２）而後意誠（４）。纔意誠、則自然無此病。」

(校1) 中華書局本は、「邪」を「且」に作る。いま、正中書局本・朝鮮整版・和刻本、卷一二・125条(二四頁)に従って「邪」とする。

(校2) 楠本本は、「知至」を「至」に作る。

(1) 思無邪 『論語』為政「子曰、詩三百、一言以蔽之、曰思無邪」。「詩」は魯頌駉篇。

(2) 又問く 以下の部分と卷十二・125条(二四頁)はほぼ同文。

(3) 若有主、邪自不能入 『遺書』卷十五・177条(二六九頁)「人心不能不交感萬物、亦難爲使之不慮。若欲免此、唯是心有主。如何爲主、敬而已矣。有主則虛、虛謂邪不能入。無主則實、實謂物來奪之。今夫瓶罌、有水實内、則雖海江之浸、無所能入、安得不虛。無水於内、則停注之水、不可勝注、安得不實。大凡人心、不可二用、用於一事、則他事更不能入者、事爲之主也。事爲之主、尚無思慮紛擾之患、若主於敬、又焉有此患乎」。卷一一三・25条(二七四五頁)「先生良久舉伊川說曰、人心有主則實、無主則虛。又一說却曰、有主則虛、無主則實。公且說看是如何。廣云、有主則實、謂人具此實然之理、故實。無主則實、謂人心無主、私欲爲主、故實。先生曰、心虛則理實、心實則理虛。有主則實、此實字是好、蓋指理而言也。無主則實、此實字是不好、蓋指私欲而言也。以理爲主、則此心虛明、一毫私意著不得。譬如一泓清水、有少許砂土便見」。『文集』卷四五「答廖子晦」「故言、有主則虛、虛謂邪不能入、各有攸當、皆是以敬爲主。若岐而爲二、恐非程子本意。又前言、有主則實、則是心有主也。後言、無主則實、則是物來奪之、中心昏塞也、辭雖同而意則異。所言虛者亦然」。

(4) 大學曰く知至而後意誠 『大学』(章句經一章)「物格而後知至、知至而後意誠」。

先生に拝礼し終わり、座が定まった。

朱子「文振（鄭南升）は最近書物の読み方が比較的細かいが、常に気持ちを集中して意識を目覚めさせ、ぼんやりしてはいけない。ぼんやりするようなのが、一番の敬でない状態だ。少しでもぼんやりしていれば、そのうち何か事がやって来ても、一気に私意に引つ張られてしまい、自分自身の主となるものがなくなってしまう。何が身で、何が心か、しっかりと見極めて、それを目の前にありあり見るようであつてこそ、自分自身の主となることができるのだ。そうなれば、やがて何か事がやって来ても、逐一適切に対処できる。」

〔以下、南升への訓戒。〕

拜先生訖、坐定。先生云「文振近看得文字較細、須用常提掇（一）起得惺惺、不要昏晦。若昏晦、則不敬莫大焉。才昏晦時、少間（校一）一事來、一齊被私意牽將去、做主不得。須用認取那箇是身、那箇是心、卓然在目前、便做得身主。少間事物來、逐一區處得當。」〔以下訓南升。〕

（校一）楠本本は、「間」を「問」に作る。

（一）提掇 意識を高める。奮い起こす、かき立てる。卷十二・128条（二一五頁）「公若知得放下不好、

便提掇起來、便是敬」。

【一一八・55】

朱子「書物を読むときは、鄭文振（南升）を手本としなさい。彼は理解したことはすぐ言葉にして、私がどこか間違っている所を指摘するのを待つ。理解できなければ、すぐに質問する。」さらに、

朱子「彼（鄭南升）は今去っていくが、心の中には疑問はないはずだ。」

又云「看文字須以鄭文振爲法。理會得、便說出、待某看甚處未是。理會未得、便問。」又云「渠今退去、心中却無疑也。」

【一一八・56】

朱子「文振（鄭南升）は最近読むのが楽になったはずだ。」

鄭文振「楽になったなど、とんでもありません。ただ先生の『集注』が一字一字着実に説明されているので、分かりやすいだけです。」

「朱子〔潘君（潘植）と鄭君は本を読まなければならない、ぜひとも明日はまず文振（鄭南升）と一緒に後段から読み始めなさい。そうしたら前の方を補足することになる。廖君（廖晋卿）もまたここから読み始めなさい。」潘立之（潘植）、鄭神童（未詳）、廖晋卿のことをいつている。」

先生曰「文振近來看得須容易了。」南升曰「不敢容易看。但見先生集注字字著實、故易得分明。」先生曰「潘兄鄭兄要看文字、可明日且同文振從後段看起、將來却補前面。廖兄亦可從此看起。」謂潘立之、鄭神童（1）、廖晋卿也。」

（1）鄭神童 未詳。『門人』（二三八頁）は鄭南升の別称としている。

【一一八・57】

朱子「君たちは、ちよつと読めるようになるつとすぐに帰っていく。」

これは、私（潘植）のことを指しておっしゃっているようであつた。

朱子「鄭文振（南升）は落ち着いて読むことができ、読み方が公正で周到だが、熱意が感じられない。立之（潘植）の言うことには、十分言い得ているところがあるが、文振などは、際立つたところもないし、かといつて何か足りないところもない。」

〔潘植〕

「朋友多是方理會得文字好、又歸去。」似指植言。又云「鄭文振能平心看文字、看得平正周匝（1）、只無甚精神（2）。如立之、則有說得到處。如文振、無甚卓然到處、亦無甚不到處。」〔植〕

（1）周匝 周到。周密。

（2）無甚精神 「無精神」は氣力が萎えている、元氣がない、精彩に欠ける。卷十・81条（一二二頁）
「觀書初得味、即坐在此處、不復精研。故看義理、則汗漫而不別白、遇事接物、則頽然而無精神」、卷一三九・66条（三三一二頁）「蜚卿問范太史文。曰、他只是據見定說將去、也無甚做作。如唐鑑雖是好文字、然多照管不及、評論總意不盡。只是文字本體好、然無精神、所以有照管不到處。無氣力、到後面多脱了」。

（53）57条担当 田村有見恵